

温厚沈着な林次官も、おもはず毗をあげた。

「左様、命令です」

「それは、不思議です。堂々たる獨立國に對して命令とは、チト解し兼ねます」

もつと強く出たいのだが、何しろ相手は猛獸に等しい國だから、うかつなことは云はれぬ。

「命令と申したことが悪ければ、日本は、相當の手段を講ずればよい」と、獨逸公使は空うそぶく。

露國公使は、黙して一言も發しない。佛國公使は、さすがに氣の毒さうに控へてゐる。佛國公使は、戰爭中、つねにわが國に同情し、時々北京在勤佛國公使よりの情報、内密にわが外務省に移報してゐたほどだから、いかにも同盟國の誼みで露國の提案に賛成したまでだと、いはぬばかりの面持である。

松青く砂白い舞子の別墅に、病を養ひつゝゐつた外相陸奥宗光は、林次官の報をきいて、悲痛の面持で天の一角を睨んだ。

「うむ、たうとうやつて来たか」かくあるべきことを豫想してゐたが、これほど露骨に三國が東になつて干渉しようとはおもはなかつた。

「三國干渉の口實は、日本遼東半島を領有するは東洋の平和に害ありといふのだが、しかし、それは表面で、實は三國ともに日本の將來を怖れるからだ」

かういふ風に考へた陸奥は、他の誰よりも、三國の要らざる干渉を憎んだ。しかし、そんなことをいつておさまつてゐられない。遼東半島は、忠勇なる同胞が流血伏屍の犠牲を拂つてはじめて得たものである。下關條約中から、この一項をのぞいたならば、それは骨抜きだ。媾和條約とは體のいゝ言葉で、日本は支那の外交戦に負けたことになる。假りに恥をしのんで三國の干渉に従ふとしたならば、攻撃の矢は、外相に向けられる。祖國のためとならば、いかなる嘲罵もなほ忍ぶが、さうなると陸海軍人が黙つてはゐない。幾千萬の國民が黙つてはゐない。しかも、一方では、三國の軍艦は、わが長崎、神戸その他の各港に碇泊し、武装して示威を試みてゐる。

露國の如きは、この勸告をなして後、日本の各港に投錨中の自國軍艦に對して、二十四時間内にいつでも出動し得る準備を命じた、といふことが陸奥の耳へも入つてゐる。つまり、露國は前年來その軍艦を東洋に派遣し、強大なる東洋艦隊を組織してあつたほどの用意周到さだ。露艦は乗組員の上陸を禁じ、いつでも出動出来るやうに黒煙を吐いてゐるのみならず、浦鹽に於ては急に五萬の豫備兵を召集するとともに、附近に在る日本人を悉く浦鹽に歸還せしめ、再度の通告



次第、本國に歸還するやう準備を命じてゐる。

獨逸皇帝は、露國皇帝に對し、「露國大將チルトフ提督の技術に信頼するが故に、獨逸艦隊の指揮命令を提督に委託する」といふ親電を發したとも傳へられてゐる。

つまり、三國は、その勸告を日本が拒絶せば、二十四時間以内に日本の各地を攻撃する準備が出来てゐることを示した。

では、三國の無法なる干渉をきれいさつぱりと刎つけて、かれらに向ふに廻して戦ふべきか。それとも、かれらの勸告を容認して、しばらく隠忍し、戈を納むべきか、この二途よりほかになかつた。

しかも、對外的禍機にのぞんだ陸奥は、同時に對内的危機をも未然に防がねばならぬ破目になつた。

國內には、すでに、おそるべき激戦があらはれはじめてゐる。國民の感情の爆發は、もう一歩のところへ迫つてゐる。

瀬戸内海を眺められる別荘の窓から眺めながら、病外相はちいつと考へこんだ。剃刀大臣の異名をとつた程の陸奥も、このときばかりは剃刀のやうに鋭く斷案を下し得ない。かれの胸中は、

悶々の情に堪えなかつた。が、やがて、陸奥の顔面に一抹の血がのほつた。

『よしッ！』かれは獨り叫んだ。

陸奥は、刻を移さず伊藤首相に提示したのは、

『一應は、三國の勸告を拒絶し、彼等の決意の程度を試み、一面においては、わが軍民の思惑をも察するが第一策である』といふ斷案であつた。

三國の干渉を拒絶するといふ痛快な斷案を下すまでに、陸奥は十年壽命をちぢめたおもひがした。

伊藤は、外相の存意をきいて『なるほど……』とうなづいた。といつて、かれにはそれほどの決意の持合せはなかつた。たとひ陸奥と同意見であつても、一應は陸海軍大臣の意見をも參酌する必要があつた。

『陸奥君がこんな斷案を下したが、兩大臣の御意見はいかゞです』と、陸海軍大臣を官邸に招じてこのことを圖つた。

『左様……』兩大臣も、急には返答ができ兼ねた。

そこで協議。日本の執るべき方策について研究を重ねるといふありさま。伊藤は言つた。



「とにかく、途は三つある。第一は、たとひ新たに敵國をつくるとも、此際三國の勸告を拒絶するといふ陸奥案」

「なるほど」

「第二は、外國會議を招請して、その決議によつて處罰するか」

「うむ」

「第三は、三國の勸告を容認して清國に遼東半島を還付するか。この三つより結局はないとおもふ」陸相はいつた。

「第一案は、實行困難であらうとおもふ。といふのは、陸軍の精銳は滿洲に在るため、いま俄かに本國の危急に應じ難いから、拒絶するにも、その方を何とかしてかゝらなければならぬ」海相も、むろん意見を吐いた。

「海軍もそのとほり。海軍の主力は澎湖島にあるので、目下日本の沿岸は、無防備の状態にある。かてゝ加へて、前年八月以來、長時日にわたつて戦つた結果、たうてい新しい強敵に向つて勝算を得ることは覺束ない」

首相は首をひねつた。

「では、第三案をとるか」といふと、兩大臣は、異口同音に、

「それは、いかにも残念千萬だ」といふ。

「しからは、已む得ず、第二案に御賛成ですな」

「……………」兩大臣は、黙したまふだつた。

そこで、伊藤は、このことを外相に傳へると、「それはいかぬ」と怒鳴つた。

「一度は、ともかくも勸告をしりぞけて、その間に外交手段を講ずるのが最善の途だ」と主張して下らぬ。

首相も弱つた。陸海軍大臣の意見をきいてみると、拒絶して俄かに大敵を向ふに廻して戦争もできない。さりとて、外相は第一案を固執して下らない。かれは、むづかしいことになつたわいとおもつた。しかし、一應は外相を説伏する必要があるとおもつた。そこで、

「この際、結果を顧慮せずして三強大國の勸告を拒絶するのは、いさゝか無暴である。おそろく三國に適當の口實を構へるのであらうから、外交的手段を行ふの餘地はあるまい」といつた。首相が、そのやうに主張すると、陸奥は、

「しかし、勸告は勸告として、これを拒絶したからとて、たゞちに三國がわが國に戦争を仕向



けるわけにもいくまいとおもふ。拒絶は戦争の理由にはならぬ』といった。

『けれど、現に露佛軍艦は、わが各港において示威運動を試み、殊に露國軍艦は二十四時間以内に出勤できるやうにとの命令を受けてゐる。無暴な勸告をする三國だから、無暴な挑戦をするは必定である』と首相は言つて、第二案を主張する。

この第二案は、軍部の賛同があるばかりではなく、舞子の別墅、外相の病床に馳つけた松方藏相、野村内相等も同意見で、陸奥案に反対してゐる。

かうなると、いくら強情我慢の陸奥も、自説を固執することができない。涙を吞んで屈服しなければならなかつた。かれは、口惜しまぎれに、病床を蹴つた。

『何といふ屈辱だ。神州君子國の歴史に一大汚點を印するものだ』と呟いた。しかし、大勢やむを得ない。かれは野村内相にいつた。

『いかにも、自分は第一案を撤回する。が、第二案を實行するといふことはむづかしいとおもふ。列國會議を招請するといふことになれば、英、米、伊等をも加へねばなるまい。ところでかれは、果してこの招請に應じてくれるだらうか。たとひ承諾するにしても、そこに相當の時日を要する。また、さうなると列國とても、勝手氣儘な主張や注文を持出すであらう。その結果は、

つひに下關係の全部を崩壊されるおそれがある』

『なるほど』野村内相は、じつさい、なるほど！と思つた。

『支那もまた、この會議のどさくさに乗じて、狡猾な奸手段を弄して、問題をいつさう紛糾せしめるだらう。かうなると、第一案よりも危険である』といつた。

『貴説は一々御尤もです』と、野村は一も二もなく、陸奥の意見に賛同し、そのことを首相はじめ、閣僚に傳へた。

『なるほど！、各國會議の招請といふやつも考へものだ』と、みんなは、はじめて陸奥の深慮を知つた。

が、それかといつて、刻下の形勢として、勸告を拒絶し、三國を相手に干戈を交へるの自信もない。『弱つたことになつたわい』首相は參つてしまつた。そこで、閣議の結果、

『三國に對しては讓歩のやむなきに至るとしても、支那に對しては一步も讓歩すべきでない』といふことに議は一決した。

つまり、これは、第三案によることになつたのである。

野村内相は翌朝舞子を發し、廣島大本營に赴いて、閣議の次第を奏上して聖裁を仰いだ。



日本帝國政府ハ、露獨佛三國政府ノ友誼アル忠告ニ基キ、奉天半島ヲ永久ニ所領スルコトヲ  
拋棄スルコトヲ約ス。

幾億の國帑と、幾萬の生命とを犠牲にして得た遼東半島は、かうして、一片の外交文書によつて、ムザムザと支那に還さねばならなかつた。

陸奥は、床衣を嚙んで泣いた。いや、陸奥一人ではなく、幾多の同胞が血涙をしほつた。果して、國民の憤怒と、怨恨と、熱涙が面にあらはれた。

『三國をやつつけろ』これは、一見無暴のやうだが、けつして無暴として迎へるには、あまりに切實な感情の累積だつた。

『おそろしい結果になるぞ』と、陸奥は呟いた。いや、誰しも、それを豫想した。對外的危機を防いだが、對内的危機をどうすることもできない。

不穩な雲行が、あわたさしく國內を去來する。憂國の青年の赤い血がたぎる。どこへ行つても露、獨、佛を憎んで卓を叩く連中ばかりだ。軍人や、學生ばかりではなく、商人も大工も、車夫も、床屋も、みんな鐵拳を握つて、さて、そのやり場に困るといふありさま。

そのうちに、三國の地金があらはれてくる。露獨佛三國は、支那、朝鮮、東洋全體の安寧を望

むといふ口實のもとにわが國に忠言したが、もちろん、これは一片の外交辭令であつて、かれらは、陸奥の豫想通り、まもなく奥の手を出しはじめた。

三國干渉の主動者は、もとより露國だ。かれは、極東に進出したのち、どうしても不凍港が必須だつた。これはペートル大帝の遺業で、それには遼東半島を獲得しなければならぬ。さらに朝鮮に手を伸し、太平洋岸にその勢力を扶植しようといふ野心を持つてゐた。ところへ、日本が現れて、支那といくさをして遼東半島を領有することになつた。露國としては自分の野心が挫かれたわけで、さてこそ三國干渉と出たのである。

獨逸は、その東方政策を全うするため、露國の好感を得ておく必要があつた。そこで、進んで加擔したわけだ。

佛國は、露國と親善の友誼關係を保持するために、引ずられるやうに歩調を一にしたのであるが、當つてみると案外日本も弱腰で、わけなく遼東還付を容認したので、これを機會に東洋に勢力を植ゑつけようと、そろそろ野心をおもてにあらはしてくる。これは分り切つた筋道だつた。

國民は、どうでも、三國相手にいくさをしなければおさまらぬといつた雲行。かうなると、勝算あつてもなくても、そんなことは介意してゐられない。



『やっつけろ！』『やっつけろ！』その叫びは、赤い血潮のやうだった。

ところが、五月十日に、遼東還付の大詔が下つた。

『百僚臣庶其能く朕が意を體し、深く時勢の大局を視、微を慎み、慚を戒め、邦家の大計を諦めることを期せよ』

と仰せ出された詔書の末節の一句は、國民の胸に深く喰ひ入つた。不穩の形勢にあつた一部の憂國の士たちも、このありがたい御諭しを拜讀して、たゞ暗涙に咽んだ。

『天子様も、お忍び遊ばされるのだ。我々が立ち騒いで何とする』

みんな、それをおもつて黙りこくつてしまつた。齒をくひしぼり、意を決し、天の一角を睨んで、忍びに忍んだ。

さうして誰いふとなく、『臥薪嘗膽』の聲を發した。臥薪嘗膽……まつたく、それにちがひなかつた。

三國は、日本のこの不氣味な沈黙をよそに、だんく／＼奥の手を出してくる。

露國は、日本に向つて忠告をして置きながら、その舌の根の乾かぬうち、清國に強要して東支鐵道敷設權をつかんでしまつた。

つゞいて、獨逸は、わづか二名の宣教師が支那人に殺されたことを名として、たゞちに膠州灣を占領してしまつた。そして翌々年には、同灣の九十九ヶ年租借を成立させた。

これとほとんど同時に、露國もまた、旅順大連の九十九ヶ年租借を強要し、つまり、ゆすり取つた形となつた。

三國干渉には縁のない英國までが、このさまを見て、ニヤリと薄氣味の悪い笑ひを洩らして乗り出して來た。つまり、清國が、日本に支拂ふべき二億兩の償金をおれの方で立替て置かうと、これを支拂つた。其の代り、日本の撤兵を期として威海衛を租借したいといひ出した。そればかりではなく、圖々しくもこんどは、『香港の防備上必要である』との口實のもとに、九龍半島の租借に成功した。

したがつて、佛國でも黙つてゐるわけにいかぬ。雲南、廣東、廣西に、だんく／＼その勢力を伸して來て、たう／＼黃州灣を租借してしまつた。

まるで、餓ゑた狼共だ。寄つてたかつて、支那を分割しようとするのだ。

『日本が、これを領有すれば、東洋の平和を紊すといつてゐながら、かれ等が、これを領有すれば東洋の平和が維持できる』とでもおもつてゐるのか、いづれにしても、支那も日本も散々愚



弄されたわけだ。

これに對して、日本は一言の抗議をもしなかつた。臥薪嘗膽……じいつと唇を噛みしめた。「深く時勢の大局を視、微を慎しみ、慚を戒め」といふ御諭しを拜して、深い沈黙を守つた。そして微かに洩らすものは、「今に見ろ。十年経つてみる」といふ呟きだつた。

ゆふべ見たよ大きな夢を 威海衛を背に負ひ 鎮遠定遠下駄にはき そのまた帆柱杖につき ほかかん山に腰をかけ 四百餘州を一またぎ あんまり咽喉がかわくゆゑ 黄河の水を一二三口に呑み干せば 何やら咽喉にたつたやう えへんくくと咳ばらひ 唾液を吐き出しよく見れば 萬里の長城が飛んで出た

といつたやうな、香氣千萬な歌をうたふものもなくなり、「今に見ろ。十年経つてみる」といふやはり獨り言だつた。

百姓も野良で、「今に見ろ。十年経つてみる」といつて種を播いた。

官吏も「今に見ろ。十年経つてみる」と呟いて、辨當提けて役所へ通ふ。

小學生までが「今に見ろ。十年経つてみる」と机を叩いて、机にカチリついて勉強する。國民の意氣と感情が、一つに融合して、戦後の經營につく。

「日本が遼東半島を領有するは、東洋の平和に害あり」といつた露國が、このやうにして、未だその舌の根の乾かぬうちに旅順大連を横領してしまつた。

「この怨み以て報るざるべからず」日本國民の憤怒は心頭に發し、熱血は五體に漲つた。この意志と感情が凝つて、やがて、對露戰の準備としての軍備の擴張となつて形の上にはあらはれた。日本人は泣き言をいはず、粗暴の舉に出でず、よく忍んで戦後の經營、特に軍備擴張に舉國一致した。

陸軍は、日清役の翌年、たゞちに軍備の大擴張を斷行した。これは、これまでの屯田兵を師團編制となし、さらに五個師團を増設することになつて、近衛及び十二師團が置かれた。たうとうこれで徵兵令發布の際、當局者の企てた六軍團の兵備は殆ど完成したわけだつた。

三十一年には、軍事上の最高顧問として元帥府が設けられ、陸軍大將彰仁親王、同山縣有朋、同大山巖、海軍大將西郷從道は、元帥の稱號を賜つて元帥府に列し、一方また、教育總監部の新設と共に、陸軍所屬の諸學校がその管轄に入つた。騎兵、砲兵各二個の獨立旅團は編成され、要塞砲兵も擴張され、すべてが日清戰爭の尊い經驗に鑑みて刷新され、改良され、今に見ろの、十年後の對露戰に向つて、準備が進められた。



海軍は、どうであつたかといふに、これまた抜かりのあらうはずはなく、富士、八島の廻航は當時我が海軍に一大威容を加へたけれども、東亞の形勢はこれをもつて安全といふわけにいかながつた。

「今にみる、十年後には」の心意氣は、こゝにも現れ、第九議會には、第一期海軍擴張計畫として、二十九年より三十五年までの七ヶ年繼續事業として九千四百九十七萬圓を支出し、戦艦一隻、一等巡洋艦二隻、二等巡洋艦三隻、通報艦一隻、驅逐艦八隻を建造すべき案を提出したが何の苦情もなく兩院を通過するといふありさま。今日のやうに、軍艦建造といはゞ、何でも無駄な金を使ふやうにとつて眼玉を光らせる代議士は一人もなかつた。

政府は、まもなく、さらに第二期擴張を計畫した。これは、總額一億千六百六十八萬圓を以て十ヶ年繼續事業として戦艦三隻、一等巡洋艦四隻、三等巡洋艦三隻、二等砲艦一隻、驅逐艦十五隻を建造することに決し、第十議會に提出したが、これも忽ち協賛を得た。まつたく、水の流るゝが如く、すらく運ばれ、兩計畫は着々として實行せられ、三十五年には殆ど全部の建造をみるにいたり、こゝに日本海軍創始以來、最も有力な六六艦隊を組織することができた。

六六艦隊といふのは戦艦敷島、朝日、初瀬、三笠、富士、八島の六隻、一等巡洋艦、八雲、吾妻、淺間、常磐、磐手、出雲の六隻を指し、艦型、速力、砲数が一切整齊され、これに笠置、千歳、高砂のやうな輕快な巡洋艦および十九隻の驅逐艦が揃つた。

「さア來い、矢でも鐵砲でも來い」はじめて、軍民ともに、この語を洩らした。

しかも、なほ、臥薪嘗膽のくるしみを、泌々味はつてゐる。日本人の底力は、もりく盛上つてくる。



## 電報の主

明治三十六年の五月の四日、潮寒い北海に一艘の怪軍艦が姿をみせた。

千島國、國後島北端の白糠といふ入江の沖に假泊した外國軍艦は、數日間、近海の測量に従事した。白糠の漁民たちは、何のために外國の軍艦が日本の領海を測量してゐるのかわからなかつた。何か、海底の寶物でも探してゐるのではないかと思つたくらるである。

チノミノチ村の小學校の先生崎山政義は、所用で白糠までやつてきて、この怪軍艦の行動に不審の眼を向けた。「おや、をかしいぞ」そのをかしいぞは、漁民たちのそれとは、いさゝちがつてゐた。

かれは昨年の春、この北邊の一寒村へ赴任した青年詩人だつた。蒲原有明や、河井醉茗と親交があり、帝都でも詩人として立派に獨立してゐる男なのだが、浮世を嫌つてこんなところの代用教員となつて赴任したのか、その邊がしかとわからぬが、とにかく、村では變り者の一人に數へてゐる。

かれは、帝都ですでに臥薪嘗炭の洗禮をうけて來てゐる。だから、怪軍艦をみて、すぐに、それをロシアの軍艦だといふことがわかつた。「なるほど、いくさの用意だな」と氣がついた。

「日露が開戦でもするやうになつた時は、この北邊でも海戦が行はれるだらう。それを見越して、ロシアの軍艦が國後水道の測量をやつてゐるのだな」このやうに判斷した崎山は、沖の怪軍艦に鋭い眼を注いだ。かれは、チノミノチ村へかへると、さつそく、東京へ電報を打つた。

どこへ打つたかといふに、友人でも、知人でも、親類でもない。赤の他人の山本權兵衛海相のところへ打つたのであつた。

テキカン一ソウ、チシマノキンカイヲサグル、イクサノヨウイアリタシ

まだ、いくさもはじまつてゐないのに、敵艦といふのも可笑いはなしたが、そこに、勃々たる敵愾心がかくされてあつた。

電報を打つたが、何の返事もない。返事がないのがあたりまで、海軍大臣が、北邊未見の青年から來た電報に、いちく返電してゐたら公務がおろそかになるだらう。小學校員の崎山は、しかし、いさゝか憤慨した。そこで、またぞろ、チノミノチ郵便局から海相宛に電報を打つた。

ロシアノグンカンガ、チシマヲウカゴウノニ、ワガカイグンハナゼコレヲモククワスルカ、イ



崎山はこの電報を打つてから丸一日待ちあぐんだが、やはり返事がない。黙殺されるのだ。かれは教へ子たちをすて、置いて、馬を飛ばして白糠へやつて来てみると、やはり怪軍艦は、うろうろしてゐる。近海の測量を未だ終らぬとみえる。

「わが警備隊は、いつたい何をしてゐるのだ」かれは、全身に熱血のたぎるのを感じた。「海軍省では、何をほんやりしてゐるのだらう」と崎山は、村を飛び出した。行先は、東京！

崎山は、郵船に三晝夜揺られて箱館に着き、それから青森へ渡り一路上野へ……。上野ステーションに着いたときは無一文だった。そこで、かれは、てくく歩いた。上野から長い道のりを空腹を堪へて歩いて来た。

海軍省の赤い煉瓦をみとめたときは、もう眼が昏んで、一步も足が前へ出ないほどだった。受付で、かれは、「海軍大臣にお目にかゝりたい」といつた。

「大臣閣下は、只今重要會議中だから、たうてい引見はできない」といふ受付の返事。

「しかし、僕の會見の要旨も重大であるから、ぜひお目にかゝりたい」といつて頑として動か

「あなたは、山本海軍大臣とどういふ御關係かな」受付は、あらためてたづねた。  
「僕も、日本人です」

「それは、わかつてゐる。だが海軍大臣とお知合か、あるひは近親とでもいはれるのか」  
「海軍大臣も、僕も、共に 天皇の赤子です」

「わかつてゐる。だから……」

「國を憂ふることにおいては、山本海軍大臣には一步も譲らぬつもりです」

「あなたは、いつたい、どこからお出でになつたかな」受付は、この男は氣が觸れてゐるのではないかな、とおもつた。

「僕は、北から参りました」

「北？」

「北海道よりさらに北、千島國、國後郡チノミノチ村からやつて参りました」

「ほう……」

「山本海軍大臣は、僕の名前をご存知のはずです」

「崎山政義さんといはれましたな」



「さうです」

「では、ちよいとお待ちなさい」無駄だとおもつたが、受付は、大臣室の方へ去つた。受付はすぐに戻つて来た。

「千島から、大臣宛に電報を打つたのは、あんたでしたか」さう言つて、受付は穴のあくほど崎山の顔をのぞいた。

「僕です」

「では、大臣閣下は、三分間ほど會つて下さるさうです。此方へ」

受付が先に立つて案内したのは大臣専用の應接室だつた。それは、圓卓子と、數脚の椅子と書棚とあるだけの殺風景な室だつた。日清戦争の豊島沖の海戦の油繪が一枚、壁に架つてゐる。

待つほどもなく、虎髯のいかめしい山本樞兵衛中將が、のつそりそれへ現れた。崎山はさすがに威壓をかんじて、そこに佇んだまゝ黙禮した。山本は、どツかと椅子についてから、「かけたまへ」と、崎山にいつた。

「はア」もぢくしてゐる。

「遠慮はいらん、かけたまへ」

「はア」と、おそろく椅子に腰かけた。

「君かね、再三、わし宛に電報を打つたのは？」山本は、鋭い眼で、青年を睨むやうにした。

「は、はい、申譯ありません」

「いや、あやまることはないよ……が、どういふつもりであんな電報を打つたのぢや」

「はい、白糠の沖合で、悠々わが領海を測量してゐるロシアの怪軍艦を目撃すると、もつたまらなくなりましたものですから……」

崎山は、やつとそれだけ言つてほつとした。

山本海軍大臣は、ニコリともせず、

「うむ……なぜそのとき、單身ロシア軍艦に打突つていかなかつたのぢや」

「えッ」

「わしに電報を打つひまがあつたなら、何故その軍艦を追拂はぬのぢや」

「はい、力が足りません」

「力？……なるほど、君は、臥薪嘗炭といふ言葉を知つてゐるか」

「はい」



「つまり、力が足りぬから、日清役以來、薪に臥ね、炭を嘗めるの苦勞をして、わが國民はみな、力をつける工風をしてゐるのぢや」

「……」

「君の電報をうけとつたとき、わしは、君たちの心意氣に感じたよ。しかし、その心意氣は君一人ではない、國民全體がその氣になつてゐる。學者が結束して主戰論を唱へてゐる。軍人も、同志が集まつて開戰を主張してゐる。學生も百姓も小商人も、みんなこの臥薪嘗炭の合言葉を實踐して、今日まで忍ぶべからざるものを忍んできた。もう戰爭機運が動いたとみえる。こゝらで一つ戰爭といふことになるだらう」

「戰爭？ やはり、政府では戰爭をする氣がありますか」

「あるか、無いかは、言明する性質のものではないが、とにかく國力も充實して來たから、日本はいつでも來いの用意が整つてゐる。むろん、千島の方へも警備艦を増派してある。けつして心配することはいらぬ。ロシアの軍艦が千島をさぐつてゐる、なるほど、さうもあらう。千島で將來いくさをする……といふことも、意圖しなければならぬだらう……ロシアは、千島だけではなく、日本國中、いたるところをも荒してゐるのぢや」

「はア、さうですか」

「日本海方面、太平洋方面にもロシアの艦隊がうかんでゐる。一種の示威さ。日本は、その屈辱をもこたへて來たのぢやよ。どうか、もう少し我慢をしてくれ」

「はッ！」 崎山の目がしらに涙がたまつて來た。

「そのうちに、君たちの期待に添ふやうなことをする肚ぢや、わかつたか」

「はい、ようくわかりました」

「君は、千島で小學校の教員をやつてをるさうぢやのう」

「はい、十四人の生徒をあづかつてをります」

「うむ。その生徒たちは、いや村の衆はみんな君を待つてをるだらう。はやく歸つて、みんな安心させてやるがよい」

「お言葉にしたがつて、一刻もはやく村へ歸ります」

「村へ歸つたら、自分の天職を守りなさい。それが何よりの國への奉公なのぢや。電報はありがたい。まして、はるくわしに忠告するために出かけてくれたその心意氣はありがたいが、それよりも、十四人の少國民をしつかり教育してくれたら、それにもまして、わしは嬉しいとおも



ふ。もし、日露のいくさがはじまつたならば、日本の壯年の大半を殺す覺悟でなければならぬ。よいか、國の力は、人民の協和ぢや。民族の力、つまり、強い國民がたくさん居なければいくら國に金があり、武器がそろつてをつても、結局負けなのぢや。その國の力、第二の國民を、よく鍛え、よく教育する君の天職は尊いぞ」

二三分の會見が、いつのまにか長引く。虎髯の山本海相は、なほも言葉を次ぎ、

「時局の切迫したいまの場合、特にわれわれは日本民族一體としての立場に徹底する事が第一義だと思ふ。個人としての立場、家族としての立場、親戚としての立場、隣人としての立場、貧乏人、金持としての立場、人民、役人としての立場、などは第二義、第三義である。これらの立場を守る事も悪いとはいはぬが、第一義を忘れた場合は、他の凡ゆるものは却つて邪魔になる。この關係をハッキリしておかなくてはならぬ。つまり日本民族一體主義の前には、個人主義も、家族主義も、隣人主義も、プロレタリアもブルジョアも、國民主義も、國家主義も、一切適切その値打を失つてしまふ。いや、それらの一切適切が、日本民族主義に還元され、綜合され統制されなくてはならぬ。今日は、まさしく民族の時代なのぢや。個人と個人、一門と一門、政黨と政黨、階級と階級、國家と國家の争ふ時代は過ぎてしまつて、民族と民族の血の戦ひの時代なのぢや」

や」

「そのとほりです」崎山は、おもはず、合槌を打つた。

「いま、世界各民族の特質を比較してみると、日本民族が最後の勝利者となるの必然が、じつに明かに理解できる。第一に日本民族は、世界第一に優れた文化、言語、文學、藝術をもつてゐる。第二にみづ／＼しい同じ魂を有してゐる。第三に世界を統る武力民族としての肉體的特質——手と足の指先の器用さ、足の力特に脛から下の力、腰と腹のねばり強さ、最も清き血液とをもつてゐる。第四に全世界民族を向ふに廻して、永久に自給自足の籠城ができるうへに、海外進撃も自由自在、確實に最後の勝利を得られる地理的特長をもつてゐる。われ／＼の祖先が代表定住して來たこの大八洲は、大群島の國、海の國、山の國、森林の國、急流の國、汐の國、火の國、温泉の國、朝日の國、清水の國、矛の國、ツルギの國、最も雨多き國、黒汐の國、豊葦原の瑞穂の國、漁の國、太平洋の國、寒帯、温帯、熱帯にのびた細長き國、アジア大陸から孤立して、しかもそれを背負つた國……であるといふ事が、日本をもつとも優れた地位に置いてゐるのぢや。つまり、日本民族のすべての特長が、全民族を統制するやうに出來てゐる。すめらみくに、すめらみたまだといふことを、充分肚に入れて天職に忠實であつてほしい」



「ありがたう存じます」

「わかつたら、それでよい。すぐに歸りたまへ」

山本海相は、そのまゝ椅子を立つた。

「閣下」

崎山青年の瞳はかどやいた。いまのさつきまで疲労と空腹に力なかつた瞳が生々としてゐた。

「まだ、何か話したいことがあるのか」

「はい。もし、日露戦争が開始された場合、どうか、聯合艦隊司令長官に東郷さんを選定してください」

「何に！ 東郷を？」

「はい。東郷さんは、日清役の殊勲者です。きつと日露のいくさでも、日本民族としての使命を立派に果たす方だらうと信じます」

「うむ、そのことは、わしも信じてをる。よろしい、引受けた」

山本海相は、らん／＼とかどやく眼を青年に注いだ。

崎山は海軍省を出ると、その足を宮城前廣場に運んだ。

「おれは、皇居を拜することを忘れて、海軍省を先にした。おれは、何といふことだ」さう呟いて、二重橋前の廣場で土下座して、皇居を拜した。いつまでも、いつまでも、そこを立去りかねるかれの感情だつた。

雨が、しよほく／＼降つて来た。木綿の羽織袴をつけた崎山は、雨に濡れても介意せず土下座したまゝだつた。

雨に煙る皇居は、墨繪のやうに美しく、しかも崇厳を極めてゐる。お濠の水は、何よりも靜謐さを湛へてゐる。

「ありがたうございます。日本のこの美しさ、皇居の崇厳さ、ここに、われ／＼の民族生命の發生があるのだ。有難うございます」

詩人の崎山だけに、たゞわけもなく感情の興奮をおほえた。そして、おのづと、かれは一聯の詩を口ずさんだ。

精悍な、たくましい二本の足を、ぐつと突張つて立つけたものだ。  
山上の樹木をみよ、

かれは雙手をあげて、十本の手を、千本の手をのばして近づく敵とたゞかつてゐる。かれは、



夕陽をうけて血のやうに光る。かれは、太陽を乗越えてくる勇者の誇りをほへえむ。お、山上に光る樹木をみよ、神々の如きけだもの、姿をみよ。かれは、山上の草むらに突立つてあざやかに世界を笑つてゐる。権力に馴らされた生活を、力なく萎えた戀愛を、そして、かれはなほ吹き干切る、おそろしい雲を、嵐を笑つてゐる。月を、太陽を……。

かれは、國際主義をわらふ民族の象徴だ。かれは、これを口ずさむと、すつと立上つた。崇嚴優美なお濠端の風景とはちがつた、荒涼、峻嚴な山上の風景を謳ふ氣持になつたのは、むしろ當然なほど、感情が昂つてゐた。

かれは、ぐしよ濡れのまゝ、歩きだした。少しゆくと、急に空腹をおほえてきた。「さうだ、こんなにお腹が空いてゐてはいくさができないぞ。山本海相はいつた。日本民族主義は内治外征一時一緒主義でなければならぬと……。さうだ、腐敗せる内部生命をみそぎするために外征だ。恥辱を與へつゝある各民族を征伐するための内部生命のみそぎだ。それは、一時一緒になされなくてはならぬ。むかしの戦争は、官吏と軍閥と政黨と御用商人を利するためのみで日本民族の多數が犠牲に終るといふやうなおそれがあつた。特に軍隊の中心をなす農村と漁村の

壯年者の命を犠牲にして、しかも酬ひられないといふおそれがあつた。これでは斷じていかん。かれらが戦場で一步をふみ出し、砲彈の一發を撃つのも、皆結局は故郷の農村や漁村の繁榮になるのだ、日本民族みんなの永久の幸福になるためだ……といふのでなくては駄目だ。それには、どうしても内治外征一時一緒にみそぎされた、日本民族主義によつて統制されなくてはならぬ」と、このとき、かれの背後から、

「そのとほり！」と合槌を打つものがあつた。

崎山はギョツとして振りかへつた。かれの背後に、立派な和服の紳士がニコ／＼笑つてゐた。

「まったく、そのとほりです」と、もう一度紳士は言つた。

「今の獨り言をきかれたのですか」崎山は、いさゝかテレた。

「左様。あなたの朗讀された詩まで、拜聴しましたよ。まったく、内治外征一時一緒主義で、この難局に當らなくてはならん。あなたは、どこから出て來られたかな」

「僕は、千島から出て來ました」

「千島？」

「國後島のチノミノチといふ村の小學教員です」



「それで……」

「それで千島近海をロシアの軍艦が測量してゐるので、それを報せに海軍省へ出頭しました。そして山本海軍大臣にお目にかゝつて、訓戒を受けて参りました」

「ほう、山本さんにお目にかゝつたのか。して、どういふことを言はれたかな海相は？」

「ロシアといくさをするかせぬかは今のところわからぬが、近いうちにあるものとして充分覺悟をきめてかゝらねばならぬ。それには、内治外征一時一緒主義で邁進せねばならぬと仰しやいました」

「うむ、海相はさういふ肚なのか」

「それから、君は折角上京されたが、その意氣はありがたいが、それよりもすぐに千島の村へ歸つて、天職に忠實なれと諭されました。つまり、民族戦争はこれから長く続く、その爲めには國民の力が要だ。強い國民を育てあげるための君の天職は尊いから、傍目もふらず小國民を教育せよと言はれ、僕はこのまゝ千島へ歸らうとするところです」

崎山は、歩き出した。紳士も續いて來た。

「千島は遠いのう。わしも千島に往つたことがある」

「さうですか」

「君は、千島に生れたのか」

「いゝえ、生れは東京です」

「東京生れが、どうして千島で教員をしてゐるのか」

「いけませんか」

「いや、これは悪かつた。いかんといふのではない。人のいやがる千島まで往つて児童教育をされる君を偉いとおもつて言つたのさ」

「……………」

「どつちや、そこらで、飯でも喰はんか。俺は湖月組の一人ぢや」

「え？ 湖月組と仰つしやると？」

「なるほど、千島の先生にはわからんだらう。湖月組といふのは、海軍々人中で日露開戦を主張してゐる仲間さ。芝の料亭湖月に集まるので、湖月組といはれてゐる、つまり札つきさ。ハッハ、ハ、ハ」

「海軍の軍人の方ですね」



「左様、秋山眞之、千秋恭二郎、山口銳などいふ連中がみんな仲間さ……どうぢや、飯を食はんか」紳士は、頻りに誘ふ。

「はい、ありがたうございますが、一刻もはやく千島へ歸りたいとおもつてゐますので、失禮いたします」と、崎山は、空腹を堪へてキツパリさういつた。

「しかし、一時間ぐらゐはいくらう」

「はい、でも千島では十四名の小學生が、僕の歸りを待ちかねてゐます。一時間といへども安閑としてはゐられないです」

「なるほど、さうか」

「では、これで失禮さして戴きます」

往きかけると、また紳士は呼び止めた。

「ちよつとお待ち」

紳士は、崎山の様子をぢいとみて、「雨にぬれてゐるのう。どうぢや、行だけが合はぬかもしれぬがわしの着物を進呈しよう。これを着て往きなさい」と言つた。

「は、いや、雨に濡れても大丈夫です。勝手に濡れたのですから」崎山は辭退した。

「しかし、風邪を引くぞ」

「なアに、千島の荒汐で鍛えた身體です。何でもありません」

「さうか、ではその意氣でやつてくれ」

「はい」

「では、君の旅行の安からんことを祈つてをるぞ」

「ありがたうございます」

別れて少し往つてから、崎山は振りかへつた。

「もし」

紳士も振りかへつた。馬場先門外であつた。

「僕は、歸りの旅費をこれから心配しようと思ふんですが、さうすると、青森行の汽車におくれます。あなたが立替へてくださるなら、よろこんで、お借して往きます」

紳士は、笑つた。

「ハ、ハ、ハ、一緒に飯を食ふことを斷つたほどの君は、歸りの旅費もないのか。なるほど、これから友人知己のあひだを駈けめぐつて、旅費を調達するのも一苦勞だらう。よし、ぢやその旅



費は俺に立替へさしてくれい」

紳士は、ふところから財布を取り出して崎山の手に渡した。

「みんな持つて往くがい」

「いや、旅費だけで結構です」

「汽車中の辨當や雑用も要るだらう。いくらもないが、みんな持つて往きたまへ」

「汽車中で辨當などは、どうでもいゝです」

「ハ、ハ、ハ、君は相當に強情ぢやのう。この財布にどれほどの大金があらう。君の旅費かつきりかもしれぬ。財布ごと清く立替へさして貰はう」

「さうですか、では預かつて往きます。しかし、千島へ往つてから直に送金できないかもしれませんが。何しろ薄給なものですから、二ヶ月ほど待つて貰ひませう」

「いゝとも。いや、そのうちにわしも、仁川沖あたりの海戦に出まふかもしれんぞ。そして戦死したら、その立替へた金で線香の一本もたてゝ貰はうか。ハ、ハ、ハ、」

「ハ、ハ、ハ、さういふことにしませうか」崎山も、おもはず笑つた。

「君の名を承はつて置かう」紳士は、別れ際にいつた。

「名前なんか、どうでもいゝぢやありませんか、同じ日本人の一人です」  
「なるほど」

「そのかはり、僕も、あなたのお名前を承はらずにお別れします」  
「なるほど。では君は、千島の國後島の教員として記憶して置かう」

「僕は、あなたを湖月組の一人として記憶して置きます」

「もし、わしが千島へ遠征する機会があつたら、尋ねてゆくぞ」

「どうぞ……千島國後留夜別村字チノミノチの代用教員とお訪ね下さい。では失禮します」  
「ぢや失禮」と、二人は別れた。

崎山は、よろゝと街を歩いた。千島に残して來た十四名の少年少女たちが、とても可愛くなつてきた。可愛くて矢も楯もたまらなかつた。かれは、いそいで汽車に乗つた。

チノミノチ村へひよつこり歸つて來て、村の學校に顔を出したが、生徒は一人も來てゐなかつた。崎山は、部落を一軒く廻つて生徒たちを誘つて來た。

「先生、どこへ行つてゐたの」生徒の一人は訊ねた。

「先生はね、東京へ往つて來ました」



「東京へ何しに行つて来たの」他の一人が訊ねた。

「偉い人に會つて来ました」

「先生よりか、偉い人がゐるの」もう一人の生徒が訊ねた。

「海軍大臣です。偉い人といふのは？」

「……？」誰も、海軍大臣の偉さがわからなかつた。

「先生、もうどこへも往つちやいやですよ」小さい生徒がいつた。

「もう、どこへも往きません。安心して勉強するがいゝ」

「先生が東京へ往つてゐる間に、外國の軍艦がきましたよ」大きい方の生徒の一人がいつた。

「外國の軍艦？ それはロシアの軍艦だらう。何をしに來たのです」

「先生、外國の水兵たちがチャチャヌボリに登りました。そしていくさのけいこをしました」

「うむ……」崎山は、低く呻くやうに呟いた。

「先生、外國の水兵は、みんな大きくて、強さうですよ」

「いや、日本の兵隊さんは、世界中で一番強いのです。ホラ、いつか武蔵艦といふ日本の軍艦が入港した事があるでせう。あの時もチャチャヌボリの籠で演習したのを、皆さんは知つてゐる

でせう」

「でも先生、日本の兵隊さんは、背が低くて、みんな弱さうです」

「いやそんな事はありません。日本の兵隊さんは、大砲や鐵砲を打つ事がたいさう上手だし、腰に力があるから、組打をしても強い」

生徒たちは、先生を絶対に信じてゐるから、さうかもしれないとやつと納得したが、ロシアの兵隊を見て、強さうだとおもつた印象も忘れられないとみえる。

崎山は、あくる日ちやうど日曜日だったので、また驛遞馬に乗つて白糠まで出かけていつた。

白糠の沖には、もうロシアの軍艦は姿を消してゐた。その代りにいつのまに現れたのか、日本の警備艦が一艘うかんでゐた。

「山本権兵衛さん、さつそく軍艦を派遣したよ」とおもつた。崎山はもうすつかり安心して、いそいでチノミノ村へ歸つた。

あくる日からは、もとの熱心なやさしい先生だつた。彼は、うんと節約して、財布ごとお金を貸してくれた紳士、湖月組の海軍將校の所へ、一日も早くお金を返さうと思つた。「あれは、きつと海軍部内でも相當の位置にある人に違ひない。お金を返すときは、芝區湖月の湖月組の方とし



て送金しようかしら』と考へた。

それからもう一つ、山本海軍大臣が、こんど戦争がはじまると、聯合艦隊司令長官を東郷さんにして下さいと言つたら、きつとさうしてやるから安心しろといったが、あれは何よりも嬉しいことだとおもつた。

「東郷さんこそ、日本民族主義の思想感情を具現した人だ。きつとあの人なら、大丈夫やつてくれるにちがひない」と信じてゐるからだつた。

崎山は、戦争になつてこの北邊までロシアの艦隊が攻めて來たら、村人を集めて義勇軍を組織し、千島を死守しようと思へた。

## 臥薪嘗膽

翌月の十二日、新橋ステーションに寺内陸軍大臣、山本海軍大臣をはじめ大臣、大將その他の文武官がたくさん居並び、遠來の客を迎へた。遠來の客といふのは、露國陸軍大臣兼侍從武官長クロバトキンだつた。

かれは、日露間の雲行の怪しいときに、日本の陸軍を視察に來たのであつた。遼東半島を支那にかへさしておいて、その舌の根の乾かぬうちに、その遼東半島に自分勝手にルールを敷き、町をつくり、山を削り、砲臺をつくるといふやり方をするロシアだ。旅順をロシアの領土の一隅だといつて、要塞を築くといつた厚かましいロシアから、その陸軍大臣が、

「日本の陸軍の強さはどれほどか、日本と戦ひをして彼を負かし彼の領土を分割するには、どれだけの兵力があつたら足りるか」を研究するために、はる／＼やつたきたわけだ。

だから、こんな癪に觸る遠來の客といふのはない。だのに、千島から國を憂へてはる／＼やつてきた崎山青年を歓迎せぬ文武百官も、この憎らしいお客を迎へねばならぬのはどうしたわけな



のか。それは、わかつてゐる。いくら憎らしい厚かましいクロバトキンでも、まだロシアと戦争にならぬうちは、彼の國の陸軍大臣だ。遠來の珍客であらうではないか。

クロバトキンは日本の汽車に乗ると「こんな小つほけな汽車か」と嘲り笑つた。だから、新橋ステーションに降り立つたとき、出迎へた文武官をジロリみて、「なんだ、こんな小つほけな顯官か」と、同じく嘲り笑つた。

かれは、寺内はじめお歴々の出迎へに、そつくりかへつたまゝ、かろく笑釋を投げた。みんな鄭重な會釋をした。がその中に、たつた一人、ギロリとした大きな眼をクロバトキンに注ぎ、睨むやうに突立つてゐる一人の軍人をみつめて、クロバトキンは、ひやりとした。

赫ら頭の、目玉の大きい仁王様のやうな男だつた。クロバトキンは、寺内陸相をかへりみて、「あの將官は誰か？」と訊ねた。よほど氣になるとみえる。

寺内は「あれは、陸軍中將長谷川好道です」と答へた。

「長谷川？……」

「さうです。日清戦役の時、旅順を一日で陥落せしめた有名な男です」

「旅順？」といつて一息入れたクロバトキンは、

「ハ、ハ、ハ、支那の旅順は一日で陥落できても、ロシアの旅順は難攻不落。長谷川には、一年かゝつても攻め落すことができない」と、せゝら笑つた。

「さうかもしれません」寺内は、あくまでも平靜を装うてゐる。

クロバトキンは圖に乗つて、「貴國と、若し不幸にして戦端を開くやうなことになるれば、吾輩は三百萬の精銳を以て、日本を攻め、一舉にして東京を占領してみせますぞ」と暴言を吐いた。寺内は微笑して、「さうかもしれません。しかしそのことは、いづれ戦場において結果をみるとしませうか。ハ、ハ、ハ、」といつた。

クロバトキンの來る二ヶ月ほど前に、神戸で舉行した大觀艦式には、ロシアのスエヨルド艦の艦長グランマツチコフがやつて來た。

かれは、日本の軍艦をみると、「日本の軍艦も外觀だけはいゝが、いざ戦争となれば、このうち幾隻が残るだらうか」と、あたりかまはず言つた。

山本海相は、この暴言をきいて「うむ」と、虎のやうに呻いた。そして「なアに、わが軍艦を半分も沈ませる覺悟でやりア、いくさが出る」と、すでに覺悟の臍をきめてゐた。

彼は、クロバトキンの傍若無人にもグランマツチコフの暴言にも、齒を喰ひしばつて堪えた。



それからまた、ロシア皇帝がドイツのカイセルに宛てた書翰といふものを知つた。「余が開戦せざる以上、日本では絶対に開戦するはずはない」といつてゐる。また「日本がロシアに對することは、車輪に止まる蠅のやうなものだ」ともいつて嘲つてゐる。そして「ロシアが、日本を破ることとは、紙を裂くよりも、易い。ロシアは熊の如く、日本は鼠の如し」ともいつて笑つてゐる。この書翰を紅毛新聞で見た山本海相の双眼は、ギラ／＼光つた。かれは、クロバトキンたちの暴言をき、ロシア皇帝の書翰を読んだあとで、ふしぎにも、忘れてゐた千鳥の一教員のことをフトおもひだした。

「崎山といふ青年は、どうしてゐるかな」これは、何でもな言葉のやうであるが、クロバトキンたちの暴言に憤慨したあとで、一服の清涼劑のやうなかんじだつた。かれは、そのあとで伊藤總理大臣のいつた言葉をおもひだして見た。

「もとより、勝敗など眼中には置いてゐない。ロシアがわが國に押寄せてきたときは、博文みづから武器を執つて卒伍に投じ、九州又は長門の海岸に出かけ、奮闘してみ國のためにつくす覺悟だ。軍人が皆死んだなら、博文は、國民と共に海岸を守り、ロシア軍には一步も日本の土地を踏ませぬ」これだ。この心意氣は、たしかにあの青年にもあつたとおもつた。

「いや、伊藤や、崎山青年だけではない。日本民族一人残らず、その心意氣でゐるだらう。三國干渉のいがい屈辱を今日まで忍んで來たのだ。それだけの意氣がなければどうする」かれは、叱りつけるやうに、むしろ怒號するやうに、獨り呟いた。

「ロシアは、大義名分を知らぬ。日本の、この焦土となつても戦ふ火の如き意氣の前には、ロシアも必ず手を焼くだらう。したがつて開戦の結果は、意外なことになるかもしれぬ。日本人は最後の一人になつても海岸を死守するのだ」山本海相はもう、すつかり開戦の肚をきめてゐた。

「さうだ、崎山といふ青年は、もし戦争になれば、東郷を聯合艦隊司令長官にしてほしいといつたが、それは、おれも望むところだ。崎山といふ青年の眼は、さすがに高い」  
「山本は、司令長官を東郷平八郎に決めてしまつてゐる。」

「さア來い、いつでも戦争だ」  
虎も、龍も、まだ臥して起き上らぬが、東亞の風雲はいよく急だ。

ある日、日比谷公園の廣場に露國膺懲大演說會といふのが催された。午前十時といふにもう、音樂堂の前の廣場は人で埋つてゐた。有髯の紳士が、壇上に立つて獅子吼してゐる。群集の中か



ら、「中川博士だ」「主戦論者の法學博士だ」といふ聲がきこえる。  
その中川博士は絶叫してゐる。

「……ピーターはその臨終まで、不凍港が欲しい、温地を奪へ、といひつゞけたが、この侵略主義に培はれたロシアは、あらゆる暴威と手段を盡し、あらゆる資金と犠牲を拂つて、ポーランドにトルコに、コーカサスに、いたるところに暴威を揮つたのである」と言つて、ちよいと口を噤んで群集を睨め廻すと、「大隈そつくり」と野次るものがあつた。中川は更に續ける。

「毒蛇のやうなこの侵略の魔手は、こんどは、次第に東洋に伸びて來た。見給へ、千六百八十九年ニブシ條約で清國に入り、千八百四十九年アイグ條約で沿海州を横領し、千八百六十年ベキン條約で日本海に伸び、ウラジオストツクに築港した。さらに明治八年、わが外交の弱腰につけこみ樺太を奪つたではないか。諸君、明治二十八年カミニーが李鴻章と結び、同胞幾萬の血と骨を埋た遼東半島を強奪したことを忘れてはならぬ！」

廣場の前方にゐる群集は、「ウワー」といふ喊聲をあげてどよめいたが、後方に佇んでゐた人人には、壇上の辯士が何を論じてゐるかわからぬ。

壇上の中川博士はなほもつゞける。卓を叩いて痛論してゐるらしいのが、遠く離れてきいてゐる

る人々にもそれとわかる。

「この遼東半島強奪に、悲憤のあまり日本刀の柄を握り締めたのは軍人許りではなかつたぞ。

復讐の念は、汐のやうに五千萬の全日本民族の胸に漲つた。千八百九十七年ドイツが膠州灣を占領したのを機會に、彼は大部隊の陸軍を旅順へ送り、續いて大連租借條約を結び、一滴の血さへ流さずに理想的な不凍港を手に入れたのである。諸君、彼は北清事變に際し、馬賊横行を口實に滿洲の諸要地に大軍を駐め、列國使臣會議は眼中に置かず、單獨に清國と交渉して全滿蒙の利益を獨占しようとしたではないか。之は失敗に終つたが、まもなくラムドルフと掲露が滿洲特權の討議を再開した。我國に對して戰闘準備中との飛報に接し、やうやく第二回露清密約討議を期し、依然滿洲の撤兵を行はず、旅順の防備を急いで來たのである。』

またぞろ、群集のうちに、「いよう、小大隈！」と叫んだものがあつた。けれど、誰もそれを笑ふものはない。依然として緊張しきつてゐる。

後方の廣場に佇んでゐる人々のうちに、このとき一人の老婆が混つてゐた。年の頃は五十七八あるひは六十にもなるか、みすほらしい姿の老婆だが、どこかに、昔の色香のあとを香はしてゐる。



老婆は、群集のもつとも後に佇んでゐるので、壇上に獅子吼する中川博士の演説の内容が何であるか、てんでわからないが、それでゐて熱心にきいてゐる。つまり老婆は、群集の拍手どよめきにつられて、やはり緊張した氣持で佇んでゐるのだ。

中川博士の演説はつゞく。

「明治三十六年四月八日、諸君はこの日を忘れてはならぬ。この日こそ、彼が滿洲撤兵の公約日、然るに、一部の兵を甲地から乙地へ移動せしめただけで、かへつて本國から續々と兵を送つてくるありさま。のみならず、條約撤廢を清國に迫つた。これ何たる暴ぞ。彼の清國を併合せずば止まぬ肚が見え透いてゐるではないか。日本の外壁は韓國、その裏畑は滿蒙である。これらを彼にせしめられては、わが神州の自滅である。誰だ花園を荒すものは……諸君、十二個師團の陸軍と、三十萬噸の軍艦は、何の目的をもつて存在して居るのか！ 撃つて、貪慾極まりなきロシアを膺懲せよ！」

中川博士の演説は終つたが、聴衆の拍手はいつまでも鎮まらない。

「撃つて！ 暴慢のロシアを！」

「われは、十年隱忍自重して來たのである。撃つて！」こんなことを口々に叫んで、群集は

なほも廣場を去らぬ。

老婆は、傍の男にきいた。「いまのは、何の演説でございませうか……」男はきよんとした顔をして、「さあ、何の演説でしたか一向にわかりませんで……」と、氣の毒さうにいつた。

老婆は、こんどは右隣の男に訊ねた。「何を、みなさん叫んでゐられるのでせうか」その男も申譯ないやうな顔をして、「さあてね、わしも、よくわかりませんよ」

老婆は少し歩いていつて、山高帽をかむつた老紳士に訊ねた。「いまのは、何の演説でございしましたかしら」老紳士は、じいと老婆の顔をみていつた。

「ロシアを懲らせよと叫んだのです」

「ロシアを？」

「左様、ロシアは、日本を侮つて暴慢無禮のことをするので、これを懲らしめてやれと力んでゐるのですよ」

「つまり、戦争を始めよといつてゐるのでございませうか」

「いかに。日本は十年臥薪嘗炭の苦しみをくるしんで來たが、もう我慢がならぬから、大砲を彼に向けてやれといつてゐるのです」



「わかりました。ありがたう存じます」

老婆は、そのまゝ、音楽堂の方へ行きかけた。老紳士は、ふしぎさうに、

「あんたは、呑込んだやうな顔をなさつたが、戦争のことがわかりますか」

老婆は、ふりかへつて、

「はい、陸軍のことはよくわかりませぬが、海軍ならば日本は大丈夫勝つとおもひますので、安心してをります」

「うむ、海軍が勝ちますかな。どうして、それがわかります」

「はい、あのう爺さん……いゝえ、榎本武揚さん以來、日本の海軍は、たのもしいとおもつてゐます……」

老婆は、爺さんといつて、瞳をいさゝか輝かした。

「どうだね、そこいらを散歩しませんかな」と、老紳士は、不思議さうに老婆を見つめながら誘ふ。

「はい……もう、どなたの演説もございせんか」

「左様、もう演説は終りです」

「でも、みなさんが、まだ立去りませんが……」

「あれは、興奮して立去りかねてゐるのです。あれは民族の意志と感情のあらはれです」

二人は、廣場を離れて歩きだした。木立の間を縫うて、花壇の方へ抜けた。

「ベンチで、少し休みませんか」老紳士は、いつた。

二人は、肩をならべてベンチに腰をおろした。

「あんたは、今のさつき、日本の海軍は、たのもしいといはれましたが、どの點がたのもしいのか、きかしてください」老紳士は、改まつた調子でいつた。

「いゝえ、申上げるほどのことでもございませぬが、たゞそのやうに感じるのをごさいます」と、老婆は切下げ髪の、細面の顔を俯向いて、遠慮勝ちに答へる。

「感じる？……さう、さう、その直感が尊いのです。百の理論よりも直感に力があります。わが海軍が、ロシアの海軍と戦つて、きつと勝つてると信じてゐるのは、あんたばかりではありません。海軍の少壯組がみんな其のやうに信じてをる。しかし閣僚は、いさゝかあやぶんでをるやうぢや」

「海軍大臣は？」



「山本は、帝國軍艦を半分沈めつつもりでをる」

「伊藤さんは？」

「總理大臣は、國民の最後の一人まで闘ふの決意のやうぢや」

「參謀次長さんは？」

「内務大臣であり、文部大臣であつた兒玉源太郎は、時局重大とあつて、一參謀次長の椅子に就いたが、兒玉は、このごろ毎日次長室にかぢりついてをる」

「何故でせうか？」

「日露の戦雲が急なので、心配になつて眠られぬのぢや。參謀次長の兒玉は、日露戦端を開くことの急迫したことを信じてをるが、やはり勝目がなと思つてをる」

「どうしてでせう？」

「しかし兒玉は、もしも露國が百萬の兵をもつて攻め來らば、われは三百萬の兵をもつてこれに當らしめる覺悟だといつてゐる。要するに數において三倍の優勢を以て最初に敵軍の士氣を挫かうといふのぢや。兒玉が、一月あまりも次長室に籠つて考へ込んでをるのは、五分は勝報、五分は敗報の覺悟でいくさをしなければならぬと信じてをるからぢや。しかし、その勝敗を六分

四分にしようといふのぢや。つまりわが軍は六勝し、露軍が四勝とまでいけば大成功といふのさ」

「でも、わたくしならば、七勝三敗、いゝえ八勝二敗の結果になるとおもつてゐます」

「うむ……湖月組の連中もさういふ心組ぢや」

「湖月組と申しますと？」

「海軍の少壯連さ」

「東郷さんなどは、どんなお考へでせう」

「東郷？ あんたは東郷のことをよく知つてをるのか」

「いゝえ存じませんが、日清戦争で偉勳をたてた方だときいてをります」

「東郷も、むろん八勝二敗の組だろ」と言つて、老紳士は、笑つた。

老婆は、顔をあげて、「もし、いくさが始まりますと、どなたが聯合艦隊の司令長官になりなさるのでせうか」と訊ねた。老紳士は眼をみはつて「ほう、妙なことを訊ねなされる。あんたは、海軍の編成とか、いろんなことを知つてゐなされるな」

「いゝえ」老婆は、また差し俯向いた。

「日清の役には伊東祐亨が司令長官であつたが、今度は誰がその任に當るか一寸わからぬな」



「わたくしは、東郷さんが適任と存じます」

「なに、東郷が……」

「はい。日清戦争の時に、豊島沖で日本海軍の意気を見せました東郷さんを、日露戦争に際して、聯合艦隊司令長官として精一杯に働かしてみたいとおもひます」

「なるほど……しかし、常備艦隊司令長官の日高勝之丞中將が、當然、いくさになると聯合艦隊司令長官になるであらうな」

「東郷さんは、どこにいらつしやいますか？」

老婆は、ねつしんにたづねる。老紳士はいよく興味を覚えて、

「東郷中將は、舞鶴鎮守府長官をやつてをるよ」

「それはいけません。東郷さんをそんなところに押込んで置くのはいけません」

「いや、別に押込んだわけでもあるまい。鎮守府長官の役目といふものもなかく重大である」

「海軍大臣は、どういふお考へなのでせうか？」

老婆は、いよく突込んでくる。老紳士は、案外に海軍のことに通じてるやうだ。

「山本は、あるひは東郷を鎮守府から引き抜いてきたい肚かもしれぬ。わしの観察ではな、日

高は進んで攻むるといふ方ではなく、むしろ退いて守るといふことをやるかもしれぬ。一か八か當つて碎けるといふやうな危険はこれをつとめて避け、鎮海灣に立てこもつて、地味に戦はうといふ戦法をとるだらう。山本は日高とは同國人ぢや。殊に兵學寮のころからの友人なので、日高のいゝところも、悪いところもよく呑込んでゐる。したがつて、皇國の興廢をこの一戦に賭するといふやうな際どい離れ業は、日高には不向きだとみて、東郷を物色してゐることだらう」

「それに東郷さんは、天子様の御信任も一段と厚いと承はつてをります」

「いかにも。天子様におかせられては、例の豊島沖の海戦以來、東郷の名を御記憶になつた様に拜聞してをる。その點、東郷は、聯合艦隊司令長官としての資格を十二分に備へてゐる譯さ」

「ですから、どうしても東郷さんを抜擢しなければならぬとおもひます」

「うむ」と言つて、老紳士は、じいつと考へ込んでしまつた。それは東郷を聯合艦隊司令長官に見立て、その成果を豫想してゐるのではなくて、この老婆の素性について考へるのだつた。

「あんたは、わが海軍を絶対に信頼できるといはれたが、そしてそれが榎本武揚以來、わが海軍が強いといはれたが、そこにはなにか意見がござるかな」

老婆は、いさゝか狼狽の氣味で、「いゝえ、たゞもう女の感情で、深い考へもなく申上げたのみ



でございます』

さういつて、ベンチを立上つた。

『ごめんなさいまし』

老紳士は、立去りかけた老婆を引きとめた。

『お待ちなさい。少々お訊ねしたいことがあります』

『……………』老婆は、立つたまゝ、こちらを向いた。

『あなたは、いまのさつき、榎本武揚のことを爺さんと親しげに言はれたが……………もしや、あなたは何……………』

『いゝえ、もう、何でもないのでございますよ』と老婆は、いよく狼狽のありさま。

『あなたは、田島さんではないのかな』

『えッ!』

『田島勝太郎と名乗つて、男装して通詞をやつてをられたお勝さんぢやないですか』

老婆は、老紳士に顔をみられるのを怖れるやうに横を向いてしまった。

『失禮ぢやが、その田島お勝さんであつたら、さうぢやと名乗つてほしいものぢや』

『いゝえ、そのやうなものではございません』

『しかし、榎本武揚を爺さんといふからには、どうも……………』

『いゝえ、わたくし、そんな女ではございません。どうぞ、ごめんくださいまし』

老婆は、老紳士を離れて、花壇の小徑を歩いた。

『お待ちなさい——わしは、榎本さんに随つて早川を脱走した一人、榊川ぢや。箱館のいくさに、賊軍一方の將として戦ひ、つひに生きのこり、恥を曝してをる捨次郎ぢや。見覚えもござるまいが、あなたが男装して五稜廓へ参られたとき、わしは、屯所におつて、あなたの凛々しい姿をみました。その田島お勝さんなら、名乗つてほしい』

『……………』

『榎本さんはな、箱館のいくさのとき、あなたに辛く當つたが、あれは日本武士として當然のこと。しかし後年、政府の重要な地位に就かれてからは、あなたの行方をたづねるため、ずる分骨を折られました。それを諒とせられたい』

『……………』老婆は、差し俯向いたまゝ、ベンチを遠ざかる。

『わしは、失禮だが、あなたのその、みすほらしい姿をみて、むかしの事をおもつて涙がたま



すぢや。お勝さん、いやさ、田島勝太郎君なら、一言名乗つてくだされ」

「……………」老婆は、しかし、なほ唇を固く噛みしめたまゝ、小徑をあるいてゆく。老紳士柳川捨次郎も、ベンチをたつた。

「あなたの、その氣持は、よくわかります。では、これ以上お訊ねはいたしません。然し、只一言、あなたは現在どういふ境涯にお在りか、それを洩らして貰ひたいものぢやが、それも叶はぬかな」

老紳士は、お勝によう似た老婆のあとに随つた。

「わたくし、浮浪の身でございます」と老婆は、それだけ言つた。

「浮浪？」

「はい、親もなく、子もなく、天涯に只一人の身でございます。……どうぞ、これ以上おきくありませんな」

老婆は、そのまゝ、急いで小徑を去つていつた。立ちどまつて、それを見送る老紳士の兩眼に、何故か涙が光つてゐた。

## 意氣と意氣

海軍省人事課勤務の千秋恭二郎少佐は、芝の海軍御用旅館有信館の二階の一室で朝早く眼をさました。「あゝ、よく眠つたわい」と、寢床の中で、大きな眼をあけて天井を見上げてゐると、とつぜん隣室から、悪夢にうなされるやうな不気味な呻き聲がきこえてきた。千秋は床の上で起き直つた。「また魔されてゐやがる」いまくしさに舌打ちした。

それから手を伸ばして呼鈴を押した。女中が、そつと入つて來た。

「お呼びでございますか」

「隣で、誰かうなされてゐるやうだが、うるさくてねむれん。どつかへ移してくれ。おれはまだ一眠りするつもりだ」

「あの千秋さま、あなたをですか」

「いや、隣室の男を、よそへ移せと命令するんぢや」

「ホホ、いくら少佐殿の御命令でも、そればかりは……………」



「なぜ、おれの命令をきくわけにいかんのぢや」千秋は冗談半分に、女中を捉へて詰問する。  
「だつて、お隣さまも、やつぱり大切なお客さまですもの。オホ」  
「お客さまでも、お茶羅子でもいゝ。安眠を妨害する奴は、放り出していゝのぢや」  
「まア、御無體なことを仰つしやる。ぢや、少佐殿が直接にいらして、放り出してごらんなさ  
いまし」

「隣の人間は誰ぢや」

「やつぱり少佐殿ですわ」

「少佐？ 一體どいつだ」

「田中治平さまでございます」

「なに、田中少佐？ うむ奴か、いつのまに隣室へころがり込んだのぢや」

「はい、あなたさまと前後してお泊りでございました」

「よしッ！」と千秋は、寢間着のまゝ立ち上がった。

「どうなさいます？」女中は、いぶかつた。

「田中を叩き起してやる。こんな非常時に、悪夢にうなされるなんか贅澤千萬だ」

「でも、まだおやすみでございませぬもの……」

「だから叩き起してやるといふんだ。田中のために、おれは一晩中悩まされたのだ」

千秋は、そのまゝ、ぶかぐくと隣室へ入つていつた。

「おい、田中、起きろ」枕元に突つたつて、大聲に怒鳴つた。

田中は、蒲團を引つかむつて、

「誰だ！ おれの室へ無断で入つてきて、やかましいッ！」

「贅澤を言ふなといふんだ。起きろ、貴様は、東郷閣下の副官だろ」

「だから、どうしたといふのだ」

「副官なら、なほのこと、悪夢にうなされるなど贅澤ぢや」

田中も、たうとう床の上に起き直つてしまつた。千秋は枕元に大あゝをかけた。

「貴様は、昨夜のべつうなされてをつたが、あれは何うしたわけか話せ」

田中は、きよとんとした顔をして、

「べつに、話すやうなわけも何もないよ」

「そんなことがあるものか」



「諄い男だ。俺には秘密なんかない」

「無いことがあるものか、男らしく話せ。話して悩みを脱しろ。軍人だつて人間だ。時には友人にも話せぬやうなことを仕でかすだらう。そのために悪夢にまで悩まされるのは愚だ。おれにも半分わけろ」

田中は、寝足りない充血した眼で、千秋を睨んだ。

「おい、邪魔も大概にしろ、俗物め！」

千秋も、これを睨み返して、

「俗物とは貴様のことだ。ゆうべのざまはなんだ。おい、田中、千秋も男だ。秘密があるなら話せ」

「……………」

「言へ」

「言はぬ。天下の疑惑を一身にあつめるとも言はぬ」

「聞く。聞くといつたからにはあくまで聞く。おれも男だ」

「……………」

田中は、何故か涙をうかべて差し俯向いてしまった。  
「そ、その涙はなんだ」

「……………」

田中は、腕を拱んだまゝ涙で頬を濡らしてゐる。

「泣いても言へんといふのか、おい田中」

「言ふことはできん。軍機の秘密ぢや」

「何にッ！ 軍機の秘密？」

「うむ、東郷閣下の命令だ」

「やつぱりさうだつたか」

千秋は、唇を噛んだ。田中は涙の目をあけて、

「友達甲斐にこれだけ云つて置く。千秋、他人のことは、うかつに邪魔できんぞ」

「わかつた。だが、貴様のゆうべからの苦しみはなかつたぞ、話せ」

「軍機の秘密だといつてゐるぢやないか、貴様も軍人ぢやないか」千秋は、じつと考へてゐたが、「うむ、いよく戦争だな、畜生…………よし、その秘密にいのちを捧げるから言へ」



「……………」

「千秋も男だ。軍人だ。誓ふ」

おもはず正座して頼む。田中も、反射的に襟を正して坐りなほし、

「畏くも陛下の御前へ、お召しになられたのだ。昨日、山本海軍大臣閣下と……………」

千秋は、眼をかゞやかして、

「うむ、いよく火蓋を切るか」

「東郷閣下は、第一艦隊司令長官と聯合艦隊司令長官の重任を帯びて働くやうにといふ御内勅を被つて退下されたのだ」

「うむ……………」

「その歸りの車中で閣下が仰せられたのだ」

「うむ、どんなことを？」

「さて、これから司令部の参謀の人選だが、わしに判るのは大佐級以上で、これ以下の人のことは殆んどわからん。田中、お前その方の人選をやつてくれ、極秘神速に、といふわけなのだ」

「なるほど」

「そして、なほ、こんどの事は國家存亡の一大事ぢやから、一切の感情、關係を外にして、眞に人物本位、器量本位、舉國一致の大精神でやつてもらひたいとの命令なのだ」

「うむ」

「千秋、どうだ、これほど重大な任務がどこにある。どこから誰を抜いて來たらいいといふのだ。いかに人物本位だといつても、性格の相違までも無視するわけにいくまい。どのやうに按配したらいいか……………」

「なるほどなア」

「どうだ、難問題だらう。おれはこの問題を解決したら、すぐに倒れてもいとまでおもつてゐるのぢや。おれが、ゆうべ一晩中うなされたのは、この難問題に當面して、心身を悩ましたからだ」

「なるほど……………」よし、それぢやとにかく、おれは今日役所から資料をできるだけ集めて來てやらう」

「うむ頼む」

それから三日目の午前。海軍省の一室で海軍大學兵學講座の教官秋山眞之少佐が、ひとり椅子



に凭れて心配さうに控へてゐた。

やがて、軍務局の山口銳少佐が足どり忙しく入つて來た。

「秋山」

「おう」秋山は、顔を上げた。

「昨夜は痛快だったのう」

「……………」

「どうした。いやに心配さうにしてゐるが」といつて山口は、相對して腰をかけ、

「急用といふのは、つまりその、東郷中將閣下の一件かい」

「うむ……………昨夜は一生一代の不覺さ。おれは、昨日の夕方こゝへ立寄るのではなかつた。いやしくじる時はしかたのないもので……………」

山口は、ぐいと秋山の肩を抑へて、

「おい、しつかりせい。湖月組ともあらうものが、そんな弱音を吐いてどうする。東郷中將閣下が、どんな意向で貴様を招んだのか、判らんぢやないか。夜分自宅へ來てくれといふのは、どうせ私用だらうが、私用だったら一晩ぐらゐる閣下に待ちほけをくはせたつて、そんなに恐縮

するにも當らんぢやないか」

秋山は腕組したまゝ、

「それアさうさ……………しかし、そんなことはあとからつくつた口實で、昨夜はまさにしくじりであつたことは間違ひはないよ」

「で、どうしようといふのだ」

「今日は、そのお詫びをしようと思ふが、どんな作戰計畫をめぐらしたらよいか、そこで貴様の智慧を借りようといふのさ」

山口は、わらつて、

「そんなことに智慧もへちまもあるものか、繕ふことはいらぬ。あからさまに意見をのべて、首腦部の腰を据ゑてやれ」

「……………」

「何をいつまで愚圖々々してゐるのか。ロシアがなんだ。東洋艦隊がなんだ。バルチック艦隊がなんだ。戦争は今だ。少壯士官の氣は立つてゐる。この機を逸したらどうする。戦争を誰がするのだ……………」



秋山は、急に腫をかじやかした。

「よしッ！ では少壯士官の意見のあるところを、あからさまに申上げようか」

「それがいゝ。昨夜は閣下のお宅へ伺はうとする途中、軍務局の山口少佐に會つて、時局を談じ大いに意氣投合し、つひに徹宵痛飲してしまひましたと言つてやれ」

「よろしい、それでおれの肚は決つた。ありがたう。實はな、山口、今朝田中に寝込みを襲はれたのだ」

「ほんとうかい。ぢや昨夜の事で？」

「まア、それだらう」

「莫迦！ なぜ、しつpegがへしを食はせなかつたのだ。われ々湖月組は、事ある毎に海軍首脳部に楯ついて、その弱腰を据直さしてやらねばならんぢやないか。どうして、それ位の機略を用ひなかつたのぢや。兵學校の秋山ともあらうものが……」

山口は頻りに、握り拳で卓を叩いた。秋山はそれを抑へて、

「まアいゝ。もう、そろく見えられる時分だ。控へたまへ」  
山口の眼は怪しく光つた。

「何に！ では東郷中將閣下がこゝへ……なるほど、さてはいよく肚が据つたかな」

「さア、どうかな」

「いや、そつと私邸へ招ぼうとしたが、やつて來ぬから役所へ呼ぶ……ちやんと判るぢやないか、いくさの準備がほゞ出來上つたといふわけさ」

「早合點してあとで見當ちがひだつたら、また湖月組の悲憤の種だ、あまり期待せんで置かうぢやないか。とにかく遠慮してくれ、もう時間だ」

「よし、それでは退却するが、秋山、いづれにもせよ、この會見は重大だぞ。しつかり頼む」

山口は、素直に引下つてしまつた。秋山は、また腕組みして考へ込んでゐるが、心が落着かぬので靜かに室内を歩き廻つた。扉をノックするものがあつた。のつそり入つて來たのは田中副官である。

「おい秋山、閣下がお見えになるぞ」

秋山は椅子のところへ戻り、

「あゝさうか、直にか」

「さうだ。おい秋山、何を考へ込んでゐたのだ。昨夜のしくじりの申譯かい」



「なアに、申譯なぞするものか。また閣下は訊かれもしまし」  
「訊かれたら何うする？」

「たゞ、濟みませんといへばい」

「それでいゝか」

「いゝとも。事情はすでに貴様から通じてあるぢやないか」

「山口の言ひぐさだらう」

「いや、おれの意志だ」

「よし、わかつた。それぢや、すぐに閣下を御案内しよう」

山口は、それをさへぎつて、

「ところが、空いてゐる室がないのだ。閣下はいま、廊下で話して居られる」

秋山は恐縮顔に、

「閣下はいつ登省なされたのか」

「たつた今、お供をして來たのだ」

このときまた、扉をノックして「東郷閣下であります」と給仕の聲がして、扉が靜かに開いた。

秋山と田中は、おもはず椅子を離れた。東郷中將は、嚴然として入つて來た。秋山は敬禮をする。東郷は、軽くそれに答へて椅子に掛け、

「まあ、お掛け」と、物しづかにいつた。

「はッ」秋山は椅子に掛ける。田中もつゞいて掛けた。

東郷は、秋山に、優しいなかにも鋭く光る眼を向けながら、

「秋山少佐、わしは貴官が、昨夜わしの宅へ來てくれなかつたことをよろこんでゐる」

秋山は、おもはず、東郷の顔を見上げた。東郷はいよく物靜かに、

「さういふ凜然たる士氣を養つてゐるのが、湖月組といふのだね」

「はい」

「湖月組といふのは、どういふ主旨の會か、話してくださいませんか」

「はい、忠君愛國の赤誠を以て、一死報國の盟ひを結んだ會であります」と秋山は、きつとなつて答へた。

「うむ。それで、その會の人達は、今の時局を何うみてゐるのかね」

秋山は、こんどばかり「はい、湖月組の士官一統はみな、多辯を用ひません。たゞ、戦ひは



意氣だと申してをります」と、明瞭に答へた。

東郷は、例の羊のやうな優しい眼の底を、ギリリと光らせて、

「意氣——なるほど……しかし、眞の意氣とは、名刀の如き冴えた心頭に發するものぢや。いたづらに逸る血氣の意氣は、それは何の役にも立たぬとわしは信じて居る」

「はッ」秋山は、おもはず頭を下けた。

「消すがよい、燃え立つ胸の火を消すがよい。それを消さぬと、皇國軍人の大義は立たぬと、わしはおもふがどうぢや」

秋山は、じつと東郷を見つめた。が、次第にその双眼が、涙でいつぱいになる。

「閣下！」

東郷はそれをうけて、

「お、わかつた」

秋山は、直立したまゝ、はふり落つる涙を拂はうとはせず、

「はい。秋山は、や、やります。きつとやります」

東郷は、満足氣に、しかも嚴然として、

「秋山少佐自重してくれ。帝國は、あんたの努力を待望して居りますぞ。近く編成される聯合艦隊の作戰參謀として大いにやつて貰はねばならぬ」

秋山は直立不動のまゝ、うれしげに、「はい、不肖秋山、いつなりとも身命を捧げて御奉公をいたす仕度は出来てをります」と言つて、ポケットから一通の手紙を取出して東郷の前に差出し、

「御覽下さい。これは不肖の母からの書面であります」

「うむ」

「日露の風雲急を告げてをる様子であるが、おまへが出征に當り、この母の事が心配になるやうなら立派に御奉公が出来ぬであらう。その際は、妾は、いつでも死ぬ用意が出来てゐるから安心せよ、と書いてあります。母にしてすでに、この覺悟があります。不肖も、兄の好古も、共に一死報國を決心して居る事は申上るまでもありません。私の一家は既にこの通り、母を始め氣をそろへて、お國の爲めに働く覺悟であります。私は母のこの覺悟を忝ないと思つて、このとはり大慈悲と認めて懐中して居ります」

と、手紙と共に東郷に渡した。

東郷は書面を受取つて黙讀する。讀んでゆくうちに、兩眼は輝いてくる。



「秋山少佐！」と、読み終つた東郷は、右手をさしのべた。

こゝは、旅順の東亞總督官邸の應接室である。極東太守アレキセイエフ大將を中央に、司令長官海軍中將スタルク、海軍少將侯爵ウフトムスキー及びステツセル中將等が、向合つて密談に耽つてゐる。スタルク中將は、アレキセイエフに何事か説明してゐる。聲が低い、よくきくと次のやうなことを云つてゐるのだつた。

「戦艦オスラビヤ、巡洋艦バーヤンは無事入港しました。これで戦艦七隻八萬四千四十二噸、装甲巡洋艦四隻四萬三千二百十六噸、巡洋艦七隻三萬八千八百二十二噸、特務艦十四隻一萬八千六百六十八噸、驅逐艦二十五隻六千四百九十七噸、水雷艇二十七隻三千八百八十五噸、合計十九萬三千八百三十噸です。日本は二十七萬一千九百五十噸現在ですが、しかし老朽艦が多いから、實戦に堪えるのは十五萬噸かと思ひます」

スタツセルもアレキセイエフに説明した。

「陸上の諸要塞は全部完備、兵員も續々到着。もう開戦となつても遺漏ありません」

「うむ」と、アレキセイエフは、うなづいてみせた。

このとき辨髪の給仕が、紅茶を持つてきた。それを、じろりとみて、スタルクは、

「閣下、支那人などを使用して危険ではありませんか」

「いや、この東洋人は愛すべき奴さ。奴隷は黄色人にかぎるよ」

ステツセルが言つた。

「しかし、要心に越したことはありません。けさも、日本の間諜を捕へましたが、老鐵山砲臺の寫眞を所持して居りました」

「うむ、よく氣をつけてもらはう」

辨髪の給仕は紅茶を配つて去ると、アレキセイエフは地圖を披けて、

「兎に角、旅順を根據地として、滿蒙から朝鮮半島までわが版圖となるのは近いうちだらう。そしてピーター大帝の仰せのとほり、全世界の大半をロシアが支配するのも、遠い事ではあるまい。どうぢやな、日本を攻め亡ぼすのに半年も掛るかな」

スタルクは小首をかしけて、

「しかし日清戦争があのとほりでしたから、案外手強いかもしれませぬぞ」と、いさゝか案じ顔である。アレキセイエフは笑つて、



「いや、相手がチャンコロではお話にならぬさ。ハ、ハ、ハ、」

このとき副官が入つてきた。

「閣下、クロバトキン將軍がお見えになりました」

アレキセイエフは、それを一瞥して「これへ」と言つた。

副官が去つたが、すぐに陸軍大將クロバトキンを案内して來た。クロバトキンは、みなに黙禮して椅子につくと、アレキセイエフはいきなりたづねた。

「どうです？ 日本の陸軍の様子は？」

「日本の軍隊は、豫想したやうな不完全なものではありませんぞ」

クロバトキンは驚のやうな眼を輝かした。アレキセイエフは、やはり笑つて、

「ハ、ハ、ハ、あなたの恐怖病だらう」

「いや、さうではない。日本陸海兩軍の充實してゐるのは、實に意外千萬でした。それにロシアを憎むこと、はなはだしいですぞ」

アレキセイエフは、なほも笑つた。

「とにかく、五十萬の陸兵と二十萬噸の軍艦があるではないか。しかも本國には、四百萬の陸

兵と三十萬噸の軍艦が控へてをるのだ。あんな日本如き未開國など、何ほどのことがあらう」

クロバトキンも、いささかムキになつて、

「もちろん、勝利は自信してゐる。たゞ、侮つてはならぬとおもふだけである」

「いや、大人と小供の勝負のやうなものさ。日本を攻め亡ほすに要する日数は、およそ半ヶ年とみてをる」

「或ひは、さうかもしれん。が、萬一を慮つて善處した方がよいとおもふ。窮鼠かへつて猫を噛むといふことがありますからなア……そこで策戦だが、大體この旅順を孤立せしめて奉天附近まで敵を誘ひ、一戦に破るがよろしいとおもふ」と、クロバトキンが言ふと、アレキセイエフは、みたび笑つて、

「ハ、ハ、ハ、あなたは、この遼東半島に敵を入れる氣でゐるのかね。一體、それが出來るとおもふかね。少しは、それを考へなさい。遼東半島には、日本兵を一步たりとも入れぬつもりぢや」

「しかし、何といたしても大事をとらなくてはならん」

「大事をとることも、むろん必要だが、わしは、日本をわが領土に加へるにどのくらゐの日数を要するかをのみ考へてゐる」



このときまた、副官が入つてきた。みると、かれは、さつきの辨髪の給仕の襟髪を引きすつてきた。

『どうした？』ステツセルは、まつ先に言つた。

『はッ、この支那人は怪しいです。窓の下で、室内の様子をうかがつてをりました』

『なに！ これへ引きすつて来い』

ステツセルは、気色ばんでいつた。副官は、みなの前へ給仕を引きすつてきた。

『わたくし、何もいたしません』

給仕は、しきりに哀號してゐる。クロバトキンは、じつと給仕の顔をみてるたが、

『これは、支那人ではない』と叫んだ。

『なに、支那人ではない？』

アレキセイエフは険しい眼でクロバトキンを睨み、さらに給仕を睨めつけた。

『これは、まさしく日本人だ』

クロバトキンは、もう一度叫んで、いきなり給仕の辨髪をつかんで後へ引いた。すると、それがすつぽり抜けて、いがぐり頭となつた。かつらだ。

『うぬ、日本人だな』ステツセルも、スタルクも、おもはず叫んだ。

『こいつ、わしを欺してゐるな』と言つて、アレキセイエフは、眞赤になつて、足をあげて給仕を蹴つた。

と、給仕は急に聲を改めて、

『おれは日本人だ』と、短く叫んだ。

『うぬ』アレキセイエフは、剣をぬいて斬らうとした。ステツセルはそれを引止めて、

『閣下、よく訊問してからにいたしたらよろしいでせう』

『さうだ、泥を吐かせてから殺してもおそくはあるまい』

アレキセイエフは、剣を鞘におさめた。

こちらは佐世保。

聯合艦隊旗艦三笠の長官室だ。東郷平八郎は、參謀と地圖を凝視してゐる。島村速雄、有馬良橋、松村菊男、秋山眞之の顔もみえる。明日にも佐世保を乗出すとの氣配だ。秋山は、いまのさつき入手した瓜生第二艦隊の所屬千代田艦長、村上格一の報告書を読んでゐる。



「千代田は、命によりて仁川港に留まりしが、三十七年一月同港碇泊の列國軍艦は公使館及び居留民護衛の爲め水兵をして續々入京せしめ、人心甚だしく動搖し、各其の堵安ぜらるの状あり、是より先仁川に碇泊せる露艦ボヤーリン、ギリヤークは旅順口に赴き仁川には一時ワリヤーク一隻のみとなりしも此の月十八日にコレーツ入港し、ワリヤークと共に千代田を挟みて投錨し三十一日更に其の東方に移泊せり、千代田艦長は萬一の際に處せんが爲め三月三日錨地を仁川埠頭に通ずる水路口に移し以て進退の便利を圖れり。五日に至り國交斷絶の急電に接し乃ち全艦員に警戒を命じ次いで電命に由り將に佐世保より來んとする第四艦隊に合せんとす」秋山の讀むのをきいてゐた伊地知艦長は、

「もう、火蓋は切られるぞ。われ／＼の出勤も間があるまい」と獨り言をいつた。長官は、石のやうに黙々として海圖をみつめてゐる。

このとき、副官が入つてきた。東郷に向つて敬禮し、

「閣下、通報丸で旅順から吉井大尉が参りました……」といつた。参謀たちは、みな瞳をかゞやかし、「おゝ、吉井大尉か——」と低く呟いたが、東郷は海圖をみつめたまゝ、「これへ」と物靜かにいつた。

副官は去つた。「よく無事で歸つたものだなア」「するぶん苦勞したことだらう」などと、参謀達がいつてゐる處へ、當の吉井大尉が入つてきた。

辨髪の支那人姿である。東郷に敬禮して、

「閣下、吉井が歸りました」

このとき、長官は、はじめて顔をあげて、

「お、御苦勞、……どうぢやね旅順の様子は？……」

「はい、諸要塞は鐵も通さぬ警戒ぶりで完備してをります。なかでも黄金山、獅子山、饅頭山の諸砲臺は、もつとも堅牢のやうであります。軍艦は、ワリヤーク、コレーツの二隻を仁川へ派遣したほか全部港内に碇泊して居ります。投錨位置はこのやうであります」

と言つて、地圖を示した。東郷は、それをみて、

「あゝ、さうか」といつたきり、唇を結ぶ。

吉井は言葉を改めて、

「閣下、僚友大谷大尉は、東亞總督の室に忍び入つたが、つひに看破られ、捕へられて、死罪に處せられました」



東郷は、じつと吉井の顔をみて「うむ」といつた。

「今に見ろ！ と敵將を睨み、自若として死に就いたさうであります」

「うむ」東郷はまた唇を結んだ。しかし、かれの双眼には涙に似た感情の動きが去來した。

## 最初の砲聲

明治三十七年二月六日、この日をもつて、わが聯合艦隊は作戦を開始したのである。

この日午前一時、東郷司令長官は、上村第二司令長官以下司令官及び各艦長等を旗艦三笠に召集して、勅語を宣示したのち、

「聯合艦隊は、これより直に黄海に進み、旅順に及び仁川に在る敵の艦隊を撃破する。瓜生第二艦隊司令官は第四艦隊及び第九、第十四艦隊を率ゐて仁川の敵に當り、その方面に於ける陸兵の上陸を掩護する。第一、第二、第三艦隊及び各驅逐隊は直に旅順口方面に向ひ、驅逐隊は闇に乗じて先づ敵艦を襲撃し、艦隊は翌日さらに是を攻撃する。此の役は、實に國家安危の繫がる所であるから、諸官庶は努力して貰ひたい」と、嚴かな口調でいつた。

かうして部署は定まつた。聯合艦隊は、この日午前九時を期して、當に出動の途に就かんとしてゐる。東郷はこのとき、麾下を代表して勅語に奉答するところあつた。

臣平八郎



謹ンテ奏ス茲ニ優渥ナル勅語ヲ下シ賜リ臣等感激ノ至リニ堪ヘス臣ハ麾下ノ將卒ト共ニ本日  
佐世保軍港ヲ發シ叡旨ヲ奉體シ犬馬ノ勞ヲ盡シ以テ

聖恩ノ萬分ノ一ニ報ヒ奉ラムコトヲ期ス出師ニ臨ミ臣平八郎誠惶誠懼謹ミテ奉答ス

やがて、豫定の午前九時發進の時到了。出羽第一艦隊司令官は、第三戰隊及び第一、第二、  
第三、第四、第五驅逐隊、第九、第十四艦隊並に特務艦春日丸、日光丸、金州丸を率ゐて先發し  
た。

つゞいて上村第二艦隊司令官は、第二戰隊を率ひてこれに踵ぎ、東郷聯合艦隊司令官は、  
第一戰隊を率ゐてまた之に踵ぎ、瓜生第二艦隊司令官は、第四戰隊及び淺間を率ゐ、陸軍運送船  
大連丸、小樽丸、平壤丸を護衛して殿發。佐世保鎮守府司令官海軍中將鮫島貞則以下の將校は  
汽艇に乗じてこれを港外に送るといふ有様。

この日は風靜かで波なく、一天拭ふがごとくであつた。幾隊の艦艦は威風堂々として、意氣既  
に敵を壓するの慨があつた。

第一戰隊は、翌朝はやくも九針岩附近に姿を見せた。このとき旗艦三笠の右舷前方に一商船の  
東航するのを認めためたので、通報船龍田丸をしてこれの臨檢をなさしめたところ、露國航海貿易汽

船會社の所有船ロシア號であつたので、直にこれを拿捕。さらに進み、午後一時二十分には、シ  
ングル島附近に到り、こゝで他の諸隊と合し、聯合艦隊はこれより旅順口、仁川の兩方面に分  
れてまさに活動を試みようといふのであつた。

日清戰爭の序幕を切つて落した當時の東郷大佐の乗つてゐた浪速は、こんどのいくさには、第  
二艦隊司令官海軍少將瓜生外吉が乗つてゐた。參謀は森山慶三郎少佐、谷口尙眞大尉であつた。

瓜生第二艦隊司令官は、最近の情報により、仁川港には露艦ワリヤーク、コレーツが依然とし  
て碇泊してゐることを確めたので、午後四時三十分、第四戰隊及び淺間、第九、第十四艦隊その  
他特務船、陸軍運送船を率ゐ、本隊と分れてベーカー島に向つた。

つまり、旗艦浪速が、またしてもいくさのキツカケをつくらうといふ運命の下にあつた。

薄暮七發島の北東を航進してゐるとき、先頭の高千穂は、すばらしい吉兆にめぐまれた。それ  
は、海洋を遊泳してゐた長鯨を、高千穂の衝角がみごとに衝いたのであつた。

たちまち、海が紅に變じた。

『ばんざーい』

『うわー』



高千穂の將兵は、雀躍した。つゞいて、このさまを知つて、第二番艦の淺間でも、第三番につづく大連丸でも、『ばんざーい』『うわー』の喊聲があがつた。

明くれば二月八日。その黎明のころペーカ島附近で浪速は、千代田の發した無線電信を感受した。仁川港内の露艦の動靜を詳細に傳へたのであつた。

まもなく、艦隊は千代田にめぐりあつた。諸般の情況に鑑み、陸兵を直に仁川に上陸させることに決し、まづ同港口附近に到つて各艦長を浪速に集め、命令を發し各艦船の部署を定め、また艦隊派遣隊司令官陸軍少將木越安綱に、「運送船錨地ニ着カバ最モ神速ニ、揚兵セラレンコトヲ希望ス」と信號した。いよく、戰鬪の肚をきめたのである。

午後二時十五分になると、千代田、高千穂、淺間、大連丸、小樽丸、平壤丸、明石、新高、左翼に蒼鷹、鴿、雁、燕といふ隊列で仁川港に向つた。

ところが、午後四時二十八分尾島附近までくると、千代田と高千穂が列を離れて前進した。たまく露艦コレーツが出港し來つたので、千代田、高千穂はさらに前進し、彼我漸く接近して、コレーツは今や二艦の左側を通過するありさまとなつた。そこで淺間は運送船隊を掩護するため直に左旋してコレーツと運送隊との中間に入つた。また蒼鷹、鴿、雁の三艦は、コレーツに向つ

て勇敢に疾驅した。

と、八尾島附近において、彼は右方に回頭せんとして、わが艦隊の近づくをみて、たうとう發砲してしまつた。

時まさに午後四時四十分。これが日露役開戦の第一の砲火であつた。

この時、すでに前針路に復して進航してゐた淺間は、これを認むるや直に旗艦、浪速に、

「コレーツ發砲せり」と信號し、運送船隊には、「引返せ」と命じ、淺間自身もまた、沖合に出でんとしたが、コレーツは、直に錨地に退却したので、ふたたび前針路に復し、浪速、明石、新高も一時少しく右方に變針したが、直にまた港内に向つた。

かくて、第四戦隊は午後五時三十分仁川錨地に到着した。千代田、高千穂及び第九艦隊は、露艦ワリヤークの南方に投錨し、運送船は諸艦の掩護の下に揚兵を開始することになつた。

また、淺間は露艦の南方に漂泊して變に備へ、浪速、明石、新高は港内を一巡したのち、明石は運送船の附近に投錨してこれを保護し、浪速、新高は港外に出て第十四艦隊と合錨し、薄暮八尾島西方の豫定錨地に假泊した。

かうして、翌九日午後二時三十分に至つて、わが運送船隊は全部揚兵を終つた。そこで、いよ



いよ本式に露艦征伐。瓜生外吉は、浪速艦橋で獨りほゝえむだ。

瓜生司令官は、揚兵終了をたしかめたので參謀谷口大尉を仁川に遣はし、帝國領事が藤木四郎を介して露國領事を経て、公文を在港露國先任艦長に送つた。

「麾下ノ軍艦ヲ率キテ九日正午迄ニ仁川ヲ退去センコトヲ要求ス、若シ之レヲ背ゼザレバ港内ニ於イテ砲撃スルノ已ムヲ得ザルニ至ルベシ」

この通告をなすと同時に、やはりわが領事を介して、英、清領事、韓國官衙及び各國居留地會長等にもその意を通知し、「砲撃ハ九日午後四時マデ實行セザルベシ」と告げ、別に英、佛、米、伊、韓五國の先任艦長にも公文を送り、「危害ヲ列國軍艦ニ及ボスナキヲ保證シ難キニヨリ、九日午後四時迄ニ錨地ヲ安全ナル地ニ變更センコトヲ望ム」と請求した。

當時仁川港内には露艦ワリヤーク、コレーツ及び商船スンガリーの他に、英艦タルボット、佛艦バスカル、伊艦エルバ、米艦ウキックスバーグ、韓艦揚式などが碇泊してゐたからである。これらの外國諸艦は、何のために仁川港へ集まつてゐたか謎の一つであつた。

それは兎に角、かうしてわが艦隊は、敵に果し狀を突つけて堂々と港外でいくさを待った。この瓜生の處置は實に立派なものであつた。まさに、わが武士道の情義をつくしたものであつたが

外國人にはこの精神がわからぬとみえて、錨地變更の要求をうけた列國艦長は、心中甚だおだやかでなかつた。そこで、連署してわが艦長に抗議してきた。

瓜生はそれを一蹴した。露艦も、われに果し狀をつきつけられながら、鳴りを鎮めてゐた。港外に出て尋常に勝負におよべ、といふ、日本の高い武士道の精神を悟る事が出来ずに愚圖々々してゐるが、わがて午後零時十分に、やつと二艦は御輿をあけて港外へ出てくる様子……察するところ、列國軍艦にすゝめられて、しぶくいくさをするため港外へ乗出すものらしい。

淺間はまづ、この動靜を察して、直にこれを瓜生司令官に通報した。

「露艦出動！」簡單明瞭なこの信號あるや、瓜生司令官は直に各艦艇を豫定位置につかしめ、全軍の戦備立ちどころになつた。

わがて、ワリヤーク、コレーツの二艦は、しぶく港外へその姿を現した。彼は、八尾島の北方約四海里のところまで航行してから、橋上高く軍艦旗を掲げた。つまり、「さあこい」と見舞へたわけだ。

そこで、わが淺間、千代田は前進し、浪速、新高もそれに次ぎ、高千穂、明石は後方に控へ、第十四艦隊（このうち鶴は千早と共に蔚島附近にあつた）は、旗艦浪速の非戦團側にあつて命令



を待つといふ陣構へであつた。

この日も、天氣晴朗で氣清く、南東の微風があつたが、海は依然としておだやかで、海上は鏡のやうだ。かうして、零時十五分には、彼我の距離約七千メートルに接近したとき、淺間は敵を左舷にみてその前路を横断しつゝ、同二十分ワリヤークに向つて轟然砲火をひらいた。もちろん敵も、直にこれに應戦した。

とにかく、勝負は初めからきまつてゐたのだ。この時淺間は右方に旋回し、敵を艦首において猛射を浴びせかけ、千代田は、専らコレーツに當り、浪速、新高も横合から時々砲火を加へ、高千穂、明石は機をみて緩射を試みるといふありさま。各艦は自重してゐた。日露の海軍の初手合せなので、支那軍艦に當るやうなわけにはゆかない。ことに場所が場所だけに、散布せる淺瀬を避け、急潮を避けるといふことも、いつさう自重せしめた原因だつたらう。

そのうちに、わが巨弾はワリヤークに屢々命中した。火焰を吐きながらもスラブ魂の露兵は大いに奮戦したが、つひにそれを支へる事ができず、ワリヤーク先づ右方に回頭して八尾島の陰に隠れた。瓜生司令官は追撃を淺間に命じた。

淺間は、速力を増してこれを追つた。千代田も單獨でこれを追つたが、速力が及ばぬので中止

した。ワリヤークは淺間に追はるゝうちに、いよく損害甚だしくなり、艦體著しく左舷に傾き、火焰に包まれつゝ、仁川錨地を望んで遁走した。これをみてコレーツも、意氣地なくもまた遁走を開始し、一時十五分、たうとう二艦は港内深く隠れてしまつた。

瓜生司令官は、遁れるものをみだりに追はず、諸艦を率ゐてフィリップ島附近に假泊した。ところが、午後四時ごろになつて、仁川港内にとぜん爆音が天を撼がし、白煙天に漲るのをみとめたので、瓜生司令官は直に、明石と水雷艇の眞鶴をしてこれを偵察せしめた。

明石と眞鶴は、仁川錨地に近づいてみると、ワリヤークは火災に罹つて、さかんに火焰をあけてゐるが、コレーツの艦影を認めることができないので、なほも港内深く進入すると、すでにワリヤークの艦體は著しく左舷に傾き、後部沈水し、後部上甲板面及び舷窓からさかんに火焰を吐き、軍艦旗、艦首旗などが携揚されたまゝだが、艦上に人なく、外國軍艦に救助されたものらしかつた。尙仔細に調べてみると、コレーツはすでに爆沈して、今や深く海底に沈み、わづかにその端艇五隻が月尾島前に遺棄してあつた。

あとで、ワリヤーク艦長ルードネフ大佐が、旅順のアレキセイエフに送つた報告に依ると、本艦は舊位地に投錨せしが損傷甚だしく各砲はすべて射撃に適せざることを發見し、戦死者は



將校一名下士卒三十一名、負傷者士官六名、下士卒重傷八十五名、輕傷百名以上を算し、最早再び戦闘を交ふるの全然不可能なるを悟りしを以て、こゝに總將校を集めて會議を開き本艦を破壊するの決議をなし（中略）錨地狹隘なるが爲め爆破すれば危険を隣艦に及ぼすの虞ありとの外國艦長の提議を容れたると恰も本艦の沈下し始めたを以てなり。尋いで艦體漸次水中に没し左舷に傾斜し各所に火災を起しながら、終に干潮時の水深十尋の處に於て全く覆没せりとある。まつたく酒蛙々々たるものである。コレーツと、汽船スングラーはおのゝ勇敢に自爆したので、ワリヤークよりは潔しとしなければならぬ。

そのころ、旅順では、二月八日露曆正月二十六日は聖母マリアの命名日といふので、たいさう賑やかだつた。

スタルク中將邸の大廣間は夜になると飾り電燈が輝き、大夜會が催される。すでに宵のうちから、陸海軍將校が夫人を伴つて、そろ／＼やつてくる。やがて定刻になると、スタルクは、一同に挨拶をした。

「今日は、正月二十六日、聖母マリアの命名日でございます、小官夫妻の主催で夜會を催しましたところ、アレキセイエフ太守ステツセル將軍を初め、皆様の御光來を忝なうし、スタル

ク一家の光榮に存じます。何の風情もありませんが、どうぞ、おゆるりとなされてください。殊に、戰爭直前で日本艦隊が近海に出没するの噂がありますが、何を申すにも當旅順は金城鐵壁、いかに日本の下瀬火藥の偉力を以てしてもこれを陥ることはできまいと信じてゐます。故に、この夜會は戰勝の祝賀會のやうなものでありませう。戰はずして、既に日本に捷つの氣概をもつて、一晩踊りあかさうではありませんか」

拍手が起つた。飾り電燈が、いよ／＼光り輝いたやうにおもはれた。次いで太守アレキセイエフが起つた。

「一同を代表して、アレキセイエフは、スタルク將軍一家の此の隆盛を祝福いたします」拍手が起つた。やがて、音樂がはじまつた。大廣間には、無數の男女が満花と亂れ咲いて舞踊をはじめた。たちまち大歡樂境と化してしまつた。

と、このとき、どこか遠方から、とつぜん砲聲が殷々と轟きわたつた。踊りに夢中になつてゐたアレキセイエフは、急に何某夫人と組んでゐた手をとき、苦々しい顔をして參謀に言つた。

「何だ？」

踊つてゐた參謀も、小首をかしけたが「また演習でありませう」といつた。



スタルクも、横から口を出して、『國交斷絶といつても、まだ、おたがひに宣戦を布告したわけでもないのに、まさか敵艦でもありますまい』と言つて、なほも、豚のやうに肥つた副官夫人と踊つてゐる。

と、またも砲聲。どこかで彼我が砲火を交へてゐるやうな様子だ。こんどは、スタルクが蒼くなつて、踊りをやめた。

『副官、要塞參謀部に、何故たゞさぬのぢや』

床を蹴つて怒鳴つた。副官は、肥つた女房の方をチラとみて『はッ』とばかり去つた。

アレキセイエフは、大きな聲で怒鳴つた。『おい、音楽を中止せい』そこで、賑やかな音楽がピタつと止まつた。たちまち、谷底のやうな静けさがやつて來た。人々の不氣味な沈黙。いや、夫人連の恐怖の吐息が、あちらでも、こちらでも洩れる。

アレキセイエフは、スタルクに向つて、

『敵の聯合艦隊司令長官は、東郷平八郎だつたのう』

『さうです』

『あれは有名な無鐵砲者ださうだが』

『さうです。日清の役で宣戦布告前に清艦を砲撃しましたが、まさか、わが海軍に向つてはそれができますまい』

砲聲が、いよ／＼はけしくなる。夫人連は、みんなわく／＼顫えながら、太守とスタルクのそばへ集まつてきた。

『戦争がはじまつたのでせうか』

若い女は、アレキセイエフに寄りそふやうにして訊ねた。

『いや、演習をやつてゐるのぢやらう』

アレキセイエフは、女の横顔にふしぎな戀情を感じながら答へた。

『でも、いつもよりか烈しいやうでございますわ』

『なアに、士氣旺盛なせるだよ……で、おまへは誰の夫人ぢや』

『まア太守さま、いやでございますわ。わたくし、あなたの參謀の妻ぢやありませんの……』

『あ、さうか』

また砲聲。こんどは、近くの砲臺がぶつ放したのだらう。

參謀夫人は、『あれッ!』といつて、太守の身體にしがみついた。



「いや何でもない。わしがついてをる」アレキセイエフは、女をだきよせた。戦争か戀か……太守はこんなことを考へた。戦争など起さずに、こんな、きれいな女を自由にした方がましだと、ころろにつぶやいた。

「とにかく、もう一遍おまへと踊らうか」

「え、どうぞ」女は、媚笑した。

「おい音楽をやれ。砲聲をケシ飛ばすやうな、賑やかな音楽ぢや」

ふたつび音楽が起つた。將校たちも、夫人連も、それにつれて踊りだした。

「わしは、あんたの美しさを認めていゝかな」太守は、参謀夫人と踊りながら、その耳もとにさしやいた。

「え、どうぞ」と、こぼれるやうな媚笑。

「あんたの参謀は、わしを憎みはしないかな」

「オホ、、だつて、夫は出世できますもの」

「なるほど……ワハ、、」アレキセイエフは、哄笑して女を強く抱いた。と、またも砲聲。

「あれッ」

「何でもない。おい、みんな踊れ。休まずに音楽をやれい」

アレキセイエフは、狂氣のやうにさげんだ。このとき、副官が戻つて来た。

「閣下、射撃演習のやうであります」

「うむ、さうぢやらう」アレキセイエフは、うなづいた。

「さあ、うんと踊りませう」

スタルクも、にはかに元氣づいた。そこへ参謀がやつてきた。

「閣下！ 大變であります」

アレキセイエフは、女を抱きながら参謀を睨みつけた。

「何が大變だ？」

「はッ、敵襲であります」

「ばかッ——東郷がいくら無鐵砲でも、此所へは攻めて来やしない」

アレキセイエフは、参謀に罵聲を浴びせて、「ダルニーから戻つて来た僚船を敵船と誤認するやうぢや困るぢやないか。参謀、おまへにも責任があるぞ」が、このとき、どこからか警戒喇叭



かなり響いた。

「おう、警戒喇叭だ」と、アレキセイエフは、參謀夫人との戀の計畫など忘れて駆け出した。これよりさき、東郷聯合艦隊司令長官は第一、第二艦隊及び各驅逐隊を率る旅順口に向つて前進してゐるが、八日午後八時、小青島附近で第三艦隊と合し、更に前進した。午後六時になると月島の南東方に到達したが、このとき東郷司令長官は、本隊とわかれて進撃する驅逐艦に信號を以て、

「豫定の如く進撃せよ、一同の成功を祈る」と命じた。

第一驅逐隊司令海軍大佐淺井正次郎は、これに答へて「確に成功を期す」と信號した。

かうして、第一、第二、第三驅逐隊は旅順口に向ひ、第四、第五驅逐隊は大連に向ひ、各艦の祝聲に送られながら暮靄の中に没してしまつた。

かくて夜に入つて、旅順口方面に航進した第一、第二、第三驅逐隊は、みな船尾燈のみを點じて老鐵山方角に向針したが、午後十時三十分、右舷艦首に方り、青白い光芒が、とほく闇を破つて明滅するのを認めた。淺井第一驅逐隊司令は、「うむ、さては旅順口外に在る露國艦隊の探海燈だな」とおもつて、そこで暫く速力を減じてこれを凝視すると、まさしく敵の驅逐艦であつ

た。それも二隻、針路を約北東にとつて巡邏警戒してゐるのであつた。

そこで、こんどは艦尾燈までも減じてわが所在を晦ました。かうして、敵を右方に避けたのち原針路に復し、午後十一時八分、ちやうど旅順新市街のスタルク中將邸では、夜會のまさに絶頂に達したところである、はじめて老鐵山の燈光を認めて船位を確かめ、さらに敵艦の點じた探海燈を見て速力を減じ、肅々として進んだ。弦月がまだのほらす、海上は眞暗闇だが、その間の中に、數多の敵の巨艦の髣髴たるを見た。

そこで淺井司令は「ようし」と許り、ただちに襲撃を命じた。

「おい来た！」先頭の白雲は、まづ左方に回頭して三本煙突なる敵艦を襲ひ、更に一撃を二本煙突の一艦に試み、全速力で南方へ退却した。たしかに手答へがあつた。發射した水雷はみな、油断してゐた敵艦に命中し、爆發するのを認めた。

「そら来い、こんどはおれ達だ」と待ちかねてゐた二番艦朝汐は、白雲の航跡を進み、これにならつて左方に回頭し、まづベレスウエート型艦を襲ひ、ついでレトウイザン型艦に迫りこれを撃ち、水雷の命中するのを認めて南々東に急退した。

この時、初めてわが夜襲を知つた敵艦隊は、俄かに騒然となり、敏捷なわが驅逐隊に盲滅法な



砲撃を加へるやうになつた。老鐵山初め、各所の砲臺でも全く寢耳に水と驚いて、俄かに砲口を  
開むけるといふ始末。

この、たゞならぬ、砲聲が、スタルク邸の深夜會に踊る人々の耳を衝いたのであつた。アレキ  
セイエフ太守が、參謀の若い夫人の肩を抱いてゐるころ、わが三番艦霞は、雨霞とふる中を、朝  
汐に倣つて敵前に突進したのであつた。

## 日本海大海戦

仁川、旅順口の最初の砲撃以來、わが海軍の偉力は事毎に發揮せられ、前後三回に亘る旅順口  
閉塞の快撃によつていよ／＼敵の心膽を寒からしめ、一方、出沒自在のウラジオ艦隊の掃滅を期  
して汐寒き北海に出動した海軍中將上村彦之丞の統率する第二艦隊の勞苦、そして、つひに、こ  
の無敵艦隊をも撃滅して、東洋における露國艦隊の影を失はしめたこと等々は、もうこの物語り  
にくだ／＼しく書く必要はない。

かうして、旅順艦隊に最後の止めをさして、明治三十七年の末、一先づ東郷聯合艦隊司令長  
官は東京に還つて來た。陛下に軍狀を申上るかたはら、「新たに來るべきバルチック艦隊をいかに  
して迎へるか」此事について會議にも列席しなければならなかつたからだ。

明治天皇は、このとき東郷に御陪食を仰せつかつた。山本海相はじめ海軍の巨星も同じやうに  
召出されたが、その席上何某といふ將官が、「東郷も、このたびは、みごとに旅順艦隊を掃滅い  
たし、十分に手柄をたて、御奉公をつくしましたので、今度、やつてくるバルチック艦隊を片づ



けるについては、自分が其任につきたいと言ふやうな面々が多うございます」と、座輿をそへたてまつる意味で陛下に申上げた。もつともこれは座輿といつても、海軍中將柴山矢八などが、内々東郷に代つて第二次の聯合艦隊司令長官として出征したい希望をもつてゐたのである。

ところが、陛下におかせられては、「いや、それはいかん」と、きつぱり御否定遊ばされた。恐察し奉るに、こんど來航する敵の強艦隊を迎へて、のるかそるかの一戦を交へる大將は、東郷よ外りにはないと、かう思召してをられたものにちがひない。

陛下はそれでもなほ心配になつたらしく、御陪食が終つたのち、山本海相をお召になつて、『東郷をかへてはならぬぞ』と、御沙汰があつた。

海相は、感激して退出し、すぐにこのことを東郷につたへた。

『どうだ、おぬし』と山本海相は、感激のまゝ多くを語る事ができず、何事かを東郷に訊ねた。

東郷は、重い口をひらいて、『わが聯合艦隊の三分の一は、やられるかもしれぬ。しかし、あとの三分の二をもつて、必ずヤツつけて見せる』と、心中を打あけた。

『うむさうか、その決心があればいゝ、うんとやつて貰はう』山本海相も、それ以上訊ねるこ

とはしなかつた。友を、あくまでも信頼できたからだ。

明治三十八年二月六日、東郷はふたゝび旗艦三笠にのつて、根據地へ引きあげることになつた。このとき、天顔に咫尺して、東郷は、

『バルチック艦隊は、小官任にある以上、誓つてこれを撃滅し、宸襟を安んじ奉る存念にござりまする』と、言上した。

撃滅……これは責任あるものが滅多に口走ることのできる言葉ではない。しかし、東郷は、はつきりと撃滅すると申上げた。東郷には、鐵のやうな固い信念があつたからだ。

眞劍勝負の體驗者はよく言ふ。『長い刀をもつてゐても、いざとなると、容易に近間に踏み込めるものではない。誰だつて命は惜しいのだから……』そこで、決心して一足先に、命がけで踏み込んでものが、きつと勝つ。つまり捨身といふやつだ。左の腕一本ぐらゐ敵にわたす覺悟があれば、腕一本で敷の一命を申うけるのは安いことだ。

東郷は、誓つて撃滅し、宸襟を安んじ奉ると申上げたのは、この肚があるからだ。山本海相に向かつて、『わが三分の一を失ふともあとの三分の二で、きつと勝つてみせる』といつたのは、この烈々たる闘志があつたからだ。だから、いよく日本海大海戦のはじまる直前、麾下に對し



て一場の訓示を與へたが、その中にかう云つてゐる。

『すでに今戦ひとなつたなら、防禦などを考へてはならぬ。積極の攻撃は最良の防禦だ。たとひ此方は非装甲艦であつても、猛火を以て敵の雄大心を抑へつけば、これ、とりも直さず最良の装甲艦である。わが砲の数が少ない場合でもその標準がたしかで發射が速であれば、わが砲の数を二倍に増したことになる。黄海の一戦について見ても、此方が三發射つ間に向ふは一發しか射つてをらぬ。故にわが一門の砲は、よく敵の三門の砲と對抗することができたのである』

なんと胸のをどる戦法ではないか。『積極の攻撃は最良の防禦だ！』この一句にこそ東郷の全精神があらはれてゐる。

あとでまた、參謀たちの前で、この戦法に補足して次のやうに云つた。

『敵の砲が大にして、わが砲が小なりとも、一向心配するには當らぬ。わが刀短くば一步を進めて敵を打てばよい。今、戦争となつて敵の弾丸がどん／＼わが艦に集まつてくる。しかも我艦から射出す弾丸は、敵艦にとどかぬといふ理由のもとに、敵を避けるものがあるとすれば、これ勇なきものだ。それでは、たいてい勝を占めることができない。かういふときには必ず進

んで、わが砲の着弾距離内に突き入り、敵艦を猛射すれば、きつと勝てる』  
それから、また云つた。

『大艦隊を指揮するには、獨立旗艦に乗つて列の外から指揮する方がよろしいと説くものがある。しかし、自分はさうはおもはぬ。自分はつねに主力艦隊の先頭に立つて、敵と闘ふ。およそ微妙なる戦機といふものは、列の外に居つては、これを捉へることができない。要するに、大艦隊の戦闘は一々命令によつて行はるゝものではない。全軍主將の態度を仰ぎ、全軍これに倣つて、しかして後、勝つことができる。主將は、全軍の目標となるべき嚮導者である。口やかましい號令者であつてはならぬ。そこで自分は、わが主力を一手に握つて、全軍の模範となつて戦はんことを期してゐる』と、實戦にのぞむ態度をあきらかにした。いかにも、東郷の面目の躍如とした訓示である。彼は沈黙だ、寡言だ。しかし、その信念に對しては、勇決で、果斷だ。そして、最も東郷のいゝところは、その烈々たる闘志だ。めつたに、引締つた唇を開くとがな。が、口を衝いて出た言葉こそは、火のやうに燃えた闘争精神だ。

この良き嚮導者の烈々たる闘争精神が、五月二十七、八兩日の日本海大海戦の各場合に遺憾なく發揮された。わが將士は、みんな、東郷の闘志に打たれて、體一杯に活動した。



大海戦の顛末を、くたくしく鼓にならべることには無用だ。それは讀者の方が、先刻御承知だからである。大海戦のことを詳かにしないものは外國人にだつてさう多くあるまいとおもはれるほどであるから……。たゞこの物語では、大海戦の勝因をたんに天祐だけに片づける事ができないといふことを、明かにしたい。

戦後、佛國の海軍中將ガブリエ・ダリウは、同國海軍大學における戰術講座において、くわしく日本海々戦の戰過を説いたのち、その結論として、「要するに、東郷提督勝利を得たのは、その自己實力の價値によつたよりは、むしろ主として露國海軍の甚だしく弱かりしに依つたのである。決して弱者となつてはならぬ」と、妙にむづかしい言葉で言つてゐるが、つまりは「東郷が強いんぢやない。ロゼストウエンスキが弱過ぎたんだ」といふことだ。

ダリウ大佐（當時大佐だつた）は米國のマハン大佐と同じやうに戰術の大家ださうだが、少くとも此一言は間違つてゐる。彼は得意の戰術論で、克明に戰争のことを吟味してゐるが、これを率ゐる双方の提督の人物を、精神を吟味しなかつた。いくさは、やはり人だ。機械でまゐるものぢやない。人間の精神力の如何によるのだ。

東郷が強いんぢやないといふのは、つまり日本人の武士道の精神がわからぬからだ。東郷は捨

身になれる強い提督だ。片腕をとられても、敵の咽喉笛へくひついでやるといふ眞男子なのだ。だから、その下に働いた將兵は、みんな露國の軍人より強いのは當然のこと。

まづ、戦ひの直前、五月二十七日午前二時四十五分、五島の白瀬の西二分の一北四十海里の地點において敵影を發見した。哨艦信濃丸の船長海軍大佐成川揆の勇猛果斷の態度をみよ。東郷の闘志を、そのまゝ引繼いだかの觀がある。

信濃丸は、このとき北京に航進しつゝあつたが、たま／＼その左舷に方り、東航する一汽船の燈火を發見した。成川大佐は、おや？とおもつた。そこで、速力を出して近づいてみると、その汽船の後橋に白紅白色の三燈を連載してゐるのを認めた。

このとき、月が東天に懸つてゐた。信濃丸は、汽船の東方に在るので、これを望見するのが不利であつた。そこで、成川は、全速力を出さしめて、彼の後方を廻つてその右舷に出た。このときは、午前四時三十分。

さて、熟視すると、三櫓二煙突で、艦型が、あたかも露國増遣艦隊中の假裝巡洋艦ツネーブルのやうであつた。

副官はいつた。「ツネーブルらしいです」



成川は、それを否定した。

「だか、備砲がないではないか、これは艦隊に属する病院船かもしれぬぞ」

そのうち、その怪しい軍艦は、電気燈で、しきりにこちらへ信號しはじめた。

「おや、奴さん、味方とまちがへたな」成川は、おもはず失笑した。

### 敵艦見ゆ！

病院船が味方と誤認して、われに信號する以上、必ず近くにバルチック艦隊があるに違ひないと成川大佐は、はやくも察した。

しかし、四邊を望むも、夜未だ全く明けず、加ふるに、朝霧深く立ちこめて何物をも認め難いので、「よし、怪艦を臨検しよう」

成川は叫んだ。この刹那である。北東を指せる艦首より左舷にわたり、千五百メートル以内の近距離において、十隻の艦影と、尙他に數條の煤煙とを發見した。

「おゝ、まさしく敵艦隊！」成川は、雀躍して叫んだ。

「待ちに待った敵艦隊だ！ウーム此奴め！」と、成川は雀躍りして喜ぶと同時に、忽ち身にひきしまるものを感じた。さうして、じつと双眼鏡を兩眼に押し當てたまゝ、しばしかな敵艦隊の陣型を眼ばたきもせず、睥め入つてゐた。熱いものが眼の中を流れた。ほうとかすんで双眼鏡が見えなくなつてしまつた。



成川大佐の两眼には思はず感激の涙が浮んだのである。「此の敵艦隊を待つ爲に兵卒まで不寝番をしてゐたのだ。いよ／＼腕を奮ふ時期がやつて来たぞ。さあア」と、成川は徐に双眼鏡を眼から離して立ち上つた。

しかし、このときはもう、信濃丸は敵艦の隊列の中間に挟まれてゐた。

こんな場合など、相當にふだん強いことをいつてゐても、多少狼狽するところだ。いや、そつとこの隊列の中をのがれようといふのは人情だ。ところが、成川のやり方は違つてゐる。敵に片腕を斬らせておいて、その艦隊の動靜を詳にしようといふのだ。すでに、敵艦隊に発見されてゐたのだ。その中で、成川は落着き拂つて、味方に向け、

「敵艦見ゆ！」の警報を發したのであつた。このとき、まさに午前四時四十五分。成川は、それで哨艦としての任務を果したわけだ。

いのちあつての物種とばかり、脱兎のごとく隊列の中をのがれるのが當然だが、まだ落着き拂つてゐる。

成川は、こんどは、敵艦隊の動靜に注意した。そして改めて、

「敵の針路は、約東北東にして、對馬東水道を通過せんとするものゝ如し」と、打電し、こん

どは敵艦隊とならんで前進した。なんといふ不敵な態度だらうか。もうまつたく捨身なのだ。

そのうち、五時二十分ごろから濛氣が深くなつて、敵艦影は隠されてしまつたが、六時五分に再びその全容をあらはした。

信濃丸は、大膽にもなほこれと接觸を保ち進行中、別に煤煙を南方に認めたので、

「あいつも敵艦隊だらう」とばかり、こんどはこれを確めんがために、やつと針路を轉じた。

これより先き、同じ哨艦の和泉は、信濃丸の發電により敵艦隊の出現を知り、艦長海軍大佐石田一郎は「そら來い」とばかり適宜針路を變じ、午前六時四十五分、北緯三十三度三十分、東經百二十八度五十分の地點で、敵の全艦隊を發見した。

石田大佐は、北東方を指して向進しつゝある濃灰色の艦影を認めると、いくばくもなく信濃丸に代り、これと接觸を保つて、敵艦を偵察しなければならぬと決心し、大膽不敵にも敵艦隊の南方四方海里まで接近して、これと並航した。

こんな無鐵砲ななしはない。まつたく、こんな無茶をやるのは東郷以外には無いかもしれぬ。しかも、これが無茶ではない。捨身になつて、和泉は敵艦隊を詳に偵察した。

「敵艦隊は戦艦八隻、巡洋艦九隻、海防艦三隻、及び假裝巡洋艦工作船若干、並に驅逐艦數隻」



と、通報し、なほ刻々變化する敵の陣形を發電するといふありさま。  
こんな、無鐵砲な、大膽不敵なわが哨艦の在るにもかゝはらず、敵艦隊はまつたくこれを無視して黙殺してゐるから可笑しい。

「バルチック艦隊は、偵察艦として優秀な快速巡洋艦をたくさん有してゐる。なのに、これを利用して、わが艦隊の動静を偵察しようとするのは妙だ」と石田大佐は、在右をかへりみていつた。

敵の提督ロジエストウエンスキーの用兵法は奇妙だとおもつたのだ。わが眇たる一巡洋艦をば常に視界内に許しながら、その傍若無人の態度に對して何等の措置をとらぬといふのは、少々不氣味になつてきた。しかも、頻々と傳へるわが無線電信を妨害しようともしない。

「はてな、敵の假裝巡洋艦ウラールは、非常に強力な無電を裝置してゐるはずだ。それにも拘らず、われの無電を妨害し混乱せしめようとならないのは、いよく可笑しいぞ」

これより先き、信濃丸の警報に接し、根據地を發したわが各戦隊は、やがて和泉の偵察報告によつて、バルチック艦隊の行動を詳細に知るに至つたので、おの／＼敵を撃滅の仕度にとりかゝつた。尾崎灣方面に在つて片岡第三艦隊司令長官は、麾下艦艇に自ら、急速豫定の部署に就く

やうに命じた。

すでに午後零時十分、片岡中將は第六戦隊を敵の前方に出し、觸接を保たしめて、しば／＼敵の状況を東郷聯合艦隊司令長官に報告した。

また白瀬の北西方に在つた第三戦隊を出羽司令長官は、敵と會せんがため、戦隊を南東に航し神崎の南方約十五海里に力り敵影を發見した。こゝにおいて敵を左舷正横四五海里にみて觸接を保ちつゝ航行し、午前十一時四十二分ごろ約八千メートルを距て、敵の前路に占位して、これを監視しつゝ北進するといふありさま。すでに、いくさの序幕が切つて落された觀があつた。

これよりさき、バルチック艦隊を迎へ撃つ場所はどこか……この點について、東郷の肚はまだ決まらぬところであつた。

明治三十八年四月十三日、佛領カムラン灣に到着したロゼストウエンスキーの率ゐるバルチック艦隊は、こゝでネボカトフ少將の率ゐる補遺艦隊を待受け、五月十四日南支那海の碇泊地を出發して以來、十九日敵艦隊は、バタン海峽を通過せり、艦船約五十隻

この情報、わが海軍に入つたのが最後で、バツタリ消息が絶えてしまつた。  
そのころ、わが艦隊は情報接受が絶えると同時に、敵艦隊は、對島海峽か、津輕海峽か、宗谷



海峽か」といふ一大疑問の雲に包まれてしまった。

「敵は、日本海の南部を迂廻して津軽海峽か宗谷海峽を通過するに違ひない。だから對島海峽に敵を待ちうけてゐては、まんまと敵に一杯喰はされてしまふ」といふ意見を持つてゐるのは大  
多數だつた。

「こゝで待ち受けてゐる場合ではない。事態は火急だ。速かに津軽海峽に移動すべきだ」幕僚  
たちも焦慮した。

まもなく、聯合艦隊司令部から密封命令が各艦隊に配られた。これには、

『五月二十五日午後三時開封』

と、表記されてあつた。つまり、この時刻までに、新しい情報が入らなければ、最後としてこ  
の密封命令の封を切るのだ。それには、

『全艦隊は直ちに津軽海峽西口附近に廻航せよ』と書かれてあつた。やがて、その朝が来た。  
午後三時はあといくばくもない。

第二艦隊の旗艦出雲の一室に、参謀藤井較一大佐が、たゞ一人物思ひに耽つてゐた。テーブル  
の上には海圖が披げられ、腕を拱み、眉をひそめてじつと沈黙をつづけてゐた。

藤井大佐は、眉をあげて呼鈴を押すと、隣室にゐた副官が入つて来た。  
「佐藤参謀を呼びたまへ」

「はッ」

まもなく、参謀佐藤鐵太郎中佐が入つて来た。それを捉へて、

「どうだ、わが艦隊は、北海に移動せねばなるまいか」

「さうですよ、結局は移動でせうが、今すぐといふことは考へものだと思ひます。動くとして  
も、その時機を見なければなりません」

「何故？」

「敵艦隊の速力を最高十節、最低八節、平均九節と推算して、敵が津軽海峽に到着するのは、  
二十七日正午とおもはれます」

「おれも同感だ」と、藤井は急に勢ひよく「では上村長官に具申し、第二艦隊の意見として、  
これを東郷長官に提出し、長官の裁断を仰がうではな  
か」

「至極賛成です」

藤井大佐は、元氣よく室を出て行つた。彼が、参謀下村延太郎少佐を伴つて、三笠を訪れたの



は、まもなくであつた。やがて、旗艦三笠の檣頭に、

『各司令官集まれ』の信號旗が掲げられた。

東郷長官も藤井大佐の献策を聞いたが、事重大であるから、もう一度最後の司令官會議をなさうといふのである。

各艦の司令官は、參謀を伴つて續々と集つてくる。司令長官室の大テーブルを取圍んで、やがてこの重大會議が開かれた。東郷は、一同を見廻してから、

『わが艦隊の北海移動は尙早といふ意見が藤井大佐から出た。集合を願つたのは、これについて各員の意見をたしかめるためである』といつて、提案の説明を藤井大佐に求めた。

藤井は、椅子を立つた。帝國興亡の一大事とおもふと、彼の語氣も、怪しく顫えた。

列座の將官は、大佐の一言半句も聞きのがすまいと固唾を呑んでゐる。

『バルチック艦隊の消息が絶えたので、わが艦隊を北海に移動すべしといふのは、この際なほ慎重に考へなければならぬとおもひます。殊に、敵が進んで津輕海峡にやつてくるとしても、まだ餘日があります。北海は今や、濃霧季で、十二分に水路に通じたものが指揮するだけでも危険があるといはれてゐます。殊には、敵は、わが哨兵の視野を避けるため、陸岸を距る百哩の地

點にあると見なければなりません。それでは、なほさら此の季節の航行は危険多く、もし津輕海峡附近で針路を誤りその入口を發見できぬときは、大艦隊はたちまち混亂を呈するものとみなければなりません。ロゼストウエンスキー提督が血迷うてもかゝる冒險を敢てするものとおもはれません』

と、いつたん口を切つて、四邊を見廻し、さらにつゞける。

『さうすると、彼は、ウラジオへの近路であり、艦隊の操縦も自由である對島水道を通過するのが本筋であるとみるより外はありません。もし北海にわが艦隊が移動したのちに、敵が對馬水道に現はれるやうな行違ひが生じ、敵艦殲滅の好機を逸したとしても、もしこれが、わが假裝巡洋艦の責任ある通信にもとづいた行動であればなほ恕すべきであります。想像によつて移動して萬一のことがあつた場合には、上、陛下に對し奉り、下、國民に對し申譯が立ちませぬ。その期にのぞんで、われ／＼が切腹しても遅いとおもひます。どうか、もう一度御熟考ねがひたく存じます』

藤井は、最後の言葉に一段と力を加へて唇を結んだ。

東郷長官はじめ並居る將官は、誰一人口を切るものはない。多數の意見は、北海移動に決



つてゐて、いつまでも鎮海灣に止つてゐることを許さぬといふ情況にある。たゞこのうちで、北海移動の尙早を説くのが藤井大佐一人なのだから心細いかぎりだ。

司令長官室は重い沈黙に鎖されてしまつた。藤井は、唇を嚙んだ。東郷も腕を拱いてゐる。参謀長加藤友三郎少将も、じつと考へ込んでゐる。もう、東郷の最後の決断を待つより外はなかつた。東郷の最後の一言で、この難問題が解決されるのだ。

北海移動か、依然鎮海灣に在つて、敵を迎へるか。この二途の一を決するのは、東郷の重い唇を衝いて出るわづか數句の言にすぎない。運命の骰子がまさに投げられやうとしてゐる。

東郷は、やがて、身動きした。彼は、大テーブルを圍む司令官の顔をじろりと一瞥して、最後に藤井大佐の、その沈んだ、しかし底光する眼をみつめた。

彼は、立ち上つた。何か一言いはうとしたとき、とつぜん、扉をノックするものがあつた。不気味な沈黙が、それによつて攪亂された。

入つて来たのは、第一戦隊司令官島村速雄少将であつた。彼はびしょ濡れの雨外套を脱いで席に就き、遅刻の挨拶をした。

島村少将は、旅順の海戦のときの聯合艦隊司令長官である。この重大會議には缺くことので

きない人物だ。

東郷長官は、ちらと島村をみた。眉一つ動かぬが、島村の意見を聞きたかつたといはぬばかりの面持である。彼は、口をきつた。

『本日、午後三時、聯合艦隊は津輕海峡に轉位する豫定であるが、貴官はどう考へらるゝか』東郷は、今まで白熱してゐた議論の内容には一切觸れず、白紙のまま、島村の意見をきかうといふのである。藤井大佐は眉をあげて島村少将をみつめた。全艦隊からその徳望才幹を仰がれて

ゐる島村少将の口から、いかなる意見がはかれるか、密かに胸の高なるのを禁じ得なかつたのは獨り藤井大佐のみではなく、並べる將官みな同じだつた。

このとき島村少将は、やをら椅子をたち上つた。そして、『時機尙早とおもひます』と、言ひきつてしまつた。

この極めて簡単な、卒直な一語は、満座の頭にガンときた。藤井大佐は、こゝろひそかによるこんだ。神に念じた甲斐があつたとよろこんだ。北海移動反對者がこゝにも一人現はれたといふことは、彼にとつて、感情をぬきにしても大きなよろこびであつたからだ。

島村少将は、満座の思惑など介意せず、堂々と自説を開陳して、さて最後に、



「せめて、二十七日午後まで、北海移動をおまちなされると萬全だと信じます」と結んだ。  
東郷の一文字の口が、微に動いた。

「うむ」唸くやうに、うむといった東郷は、拱いでゐた腕を解いてたち上つた。

「暫らくまつてゐてくれたまへ」

そのまゝ、彼は、たゞ一人隣室へ去つた。彼は、人氣のない隣室に去り、椅子にドカと腰をおろすと再び腕をくんだ。ほとんど、黙禱するやうな姿である。一分、二分、三分、五分、七分。不気味な沈黙がつゞいて、やがて十分ほどたつと、東郷は椅子を離れて歩き出した。

彼の顔は、晴れやかだつた。いまのさつきの沈痛な顔ではなく、鬨志満々たるものが、その双眼にも、口もとにも、眉毛にも、うかゞはれた。彼は、ふたゞび會議室に姿を現した。

「津輕海峡轉位は暫く中止する。諸君、今日は御苦勞でありました」

東郷の凜とした聲は、室内に響き渡つた。これで、萬事が決つたのだ。

さて、五月二十七日午前四時四十五分、哨艦信濃丸から「敵艦二〇三地點にみゆ」との第一警戒電を受けするまで、聯合艦隊は不動の姿勢であつた。

この日東郷長官は、旗艦三笠に坐乗し、鎮海灣に在り、第一、第二、第四戦艦隊らは加徳水

道に假泊してゐたが、敵艦出現の報に接するや、午前五時九分、直に加徳水道に在つた上村第二艦隊司令長官は所在總艦艇に出港を命じ、第一戦隊第二戦隊第四戦隊および第一、第二、第三、第五驅逐隊並に第九、第十四、第十九艇隊は順次拔錨した。

東郷は、このとき、大本營に向つて打電した。



## 此の一戦!

「敵艦見ユトノ警報ニ接シ、聯合艦隊ハ直ニ出動之ヲ撃滅セントス、本日天気晴朗ナレトモ浪高シ」

それは有名な詩的豊かな、餘情のある、しかも戦前既に敵を呑むの氣概ある大文章であつた。東郷は、それを大本營に打電すると、直に三笠を率ゐて加徳水道に出で、午前六時三十四分第一戦隊の先頭に占位し、四十餘隻の艦艇を従へ、隊伍整々として發航したのであつた。

いよ／＼火蓋を切つたのは、午後二時八分である。その前に、東郷長官は、決戦を試みんとするや三笠の針路を西に命じ、同時に檣上高く信號旗を掲げ、麾下に令した。それが、また有名な、

「皇國ノ興廢此ノ一戦ニ在リ各員一層奮勵努力セヨ」

の明文句である。これが午後一時五十五分のことである。

全艦隊の將士が、この信號を望んで感奮し、必ず敵を殲滅して君國に報せんことを期した。

この信號の事を記せば、いきほひネルソン提督のトラファルガ海戦における信號を想ひ出す。それは、

「英國は、各員が其の責務を果さんことを期待す」といふのである。

ところで、あの海戦のさ中にネルソンが何によつて、これを各艦に信號したかといふに、それは、手旗であつた。「英國は」からはじまる長い信號を手旗でやると、符號が十二になり、旗の數が三十一旗になる。そして、各綴りに一人づゝとして都合十二人の人數を要したわけだ。殊に最後のDUTYに對する符號の用意がなかつたので、一字づゝ別々に符號の旗を使つたのだから、非常に複雑な組合せとなり、時間もかゝつたわけだ。

東郷長官の信號は、ネルソンの信號よりも長いので、定めしより以上の手數を要したかといふのに、事實は、たつたZ旗一旗でよかつた。

たつた一旗の旗で「皇國ノ」からはじまる、あんな複雑な意味を現はすことが出来たと、當事者以外は、眼を瞪つたのも當然。あのZ旗が三笠艦の檣上高く掲げられると、各艦はみな、立どころにこれを解したといふから豪勢なものである。それはさておき、

午後二時二分、わが主隊は針路を變じ、東西微南にとり、まづ敵に對して反航通過するやうに



装うた。そして、同五分に至つて、最先頭の旗艦三笠は、急に左折して東東北に變針し、第一、第二戦隊も、順次これに倣つて敵の先頭を斜に壓迫した。

第三、第四、第五、第六、戦隊は何れも、南下して、敵の後尾を衝かんとした。

このとき、敵の先頭は、わが南微東に方り、八千メートルを距て、北東微北に航進しつゝあつた。わが旗艦三笠が變針するをみるや、おもはず全艦隊に、

『ウラー』の喊聲があがつた。

『東郷提督は逆上した』『東郷は氣が狂つた』と敵の將士は叫んだ。

して、機乗すべしとばかり、忽ち一團の白煙がスウォーロフより起つた。つゞいて數艦一時に砲火を開いて、われに戦ひを挑んだ。

しかし、わが艦隊は、これには逆はず、ますます急航して二時十分射距離六千メートル内外となつたとき、はじめて三笠が之に應戦した。續いて他の艦隊も射出した。

午後二時五分、急に變針して、十分にはじめて、砲火を開いたのだから、そこに四五分の開きがある。

この三分間に、わが三笠は素手で敵以下をくだつたわけである。あとで調べてみると、その四

五分間に、敵艦が三笠に向つて撃ち出した弾丸は三百發を下るまいといふことだ。

なぜ東郷は、こんな危険なことをやつたかといふに、そこに日本人でなければ出来ぬ捨身の戦法がある。東郷は火蓋を切る前に、丁字の形に、敵の前に立ちはだかつて双手をひろげ、

『オア來ス』

と、やつたやうなものだ。

これが、そも／＼戦捷の第一因だ。そして、ダリウ大佐の考へる東郷とちがつた東郷のねうちのあるところなのだ。闘志のある提督でなければ、出来なはなれわざである。

彼は、敵の面前で彈丸集中の眞只中で、都合のいゝ陣形にかへるまで、四五分間じつと忍耐した。この度胸が紅毛人にはなかく／＼わからぬ。四五分間の辛抱の後には、形勢が逆になつて、わが艦隊は、敵の全艦隊を端から虱つぶしに片づけることが出来るので、とても有利になつた。

東郷の闘争精神は、性來の負けず魂は、四五分間堪へて、三十分かゝつて、大體日本海大海戦の勝敗の數を決めてしまつた。

まづ敵の第五番艦オスラーピアが火を吐いた。つゞいて先頭にある旗艦スウォーロフが大火災を起し、これにつゞくアレクサンドル三世も無慘にも火焰をあげるといふ始末。三十分たゝぬう



ちに、その他の諸艦も相次いで火災を起し、濃煙濛氣と相混じて海面を蔽ひ、わが射撃を中止せしめたからであつた。

かうして、わが主隊は、敵を撃破しつゝその前路に出で約南東に航進したところ、敵は俄に針路を北東に變じた。つまり、わか後尾を廻つて逃走しようといふのだ。

そこでわが第一戦隊は、一旋回して、午後三時五分、日進を嚮導せる單縦陣をつくり、西北四に進航した。第二艦隊もまた、いつたん第一戦隊に倣はうとしたが、たまく敵の諸艦は、ふたたび東方に回頭せんとするのを認めたので、前針路によつて速力を出し直進した。このとき、敵の旗艦スウオーロフは、大損害のために列外に出た。これと同時に、他の二三艦もこれと運命を共にし、満身に創をうけたオスラトビヤは、このとき、つひに沈没するに至つた。

混亂した諸艦は、このとき南東に變針したが、第二戦隊は、その西方に旋轉すべきを察して、左十六點の正面變換を行ひ左舷より砲撃をつゞけ、だんく西方に航行した。

もう、かうなると、名にし負ふバルチック艦隊も、めちやくだ。旗艦を失ひ、僚艦にわかれ、おもひくゝに散らばつて、ウラジオ指して逃走しようといふありさま。

それをまた、一艘ものがさじと追ひまくるわが艦艇……すでもう、海戦ではなくて、掃海で

ある。東郷はじめ、わが將士の鬪志は最後まで發揮されて、翌二十八日の午後二時ごろまでには、まったく海の掃除が片付いてしまつたかたち。



## 無人島の主

アジア州と北アメリカ州が對峙し、もつとも接近したところはベーリング海峡。露領カムチャツカ半島から、はるかに北地、チウクチ半島の東端テジネフ岬は、とりもなほさずアジア州の最東端で、アラスカのプリンスオブウエールズ岬は、これまた北アメリカ州の最西端、この海峡が、ベーリング海峡だ。

北は、茫漠として、人生の無窮を暗示するやうな氷の海—北極洋、南は、半圓陣をつくつて、アメリカ合衆國の北の守りとなつてゐるアレウト群島、この中間の海洋がベーリング海。

こゝで、氷山が砕けて、雪塊が解けて海流となり南下するのが親汐……千島海流となつて日本海流と合して、おそろしい濃霧をつくる。北太平洋は、だから、つねに濃霧のために太陽が赤い。洋々たるベーリング海と、太平洋の境界をなすアレウト群島の列外にある粟粒ほどの無人島が、この霧の海上に幾世紀も置き忘れられてある。

北太平洋上の、粟粒ほどの無人島といったが、もちろん、地圖の上では、粟粒どころか、まっ

たく黙殺されてゐる。たゞ、稀にその沖合を通過する國籍の不明な密獵船などが、これを發見することがあるが、みんな氷山の一つぐらゐにおもつて看過するといふありさま。

昭和〇年八月二十七日の朝。その日は、やはり名物の海霧のために、島の存在すらわからなかつたが、この無人島南岸の、とある入江に、漂然と着水した怪しい一臺の單葉飛行機があつた。べつに、發動機の故障のために不時着水した様子もない。すこぶる悠然と目的地についたといはぬばかりの面持。もちろん、こんな無人島のことだから、液體燃料補給のため立寄つたといふのでもない。針路を誤つて漂着したとしては、聽てその飛行機の操縦室から上半身を外にあらはした人間の顔は、あまり晴々しかつた。

飛行士は、日本人だ。三十三四の屈強な日本男兒。それから、同乗してゐるのは、四十近い海軍將校といつた風格の男。

約三十分の後、この二人は無人島に第一歩をふみ入れた。八月の事とて、さすがに氷雪をみることができなかつた。それどころか、全島には、一の樹木もみられなかつた代りに、滿地が高山植物の端麗な花に匂うてゐた。黄、白、紅、淡紫……色とり／＼のお花畑だ。海軍將校らしいのが、海岸の砂地に下り立ち、お花畑に足を踏入れるとき、年下の飛行士をかへりみて、



「君、こゝの高山植物は、千島のもと同種類らしいぞ」

飛行士は、海霧の中で、島の地形を究めようとしてゐたが、さういはれて、はじめて足下の端麗な花の姿をみた。

「チンマアサギリサウヤ、シコタンヨモギ、エゾオグルマ、フオーリーアザミ、チシマキンレイカーいろ／＼あるぢやないか。してみると、こゝもわが千島と同一地帯とみることができると、つまりわが版圖だね」

「さうです。われ／＼が、発見した島です。大日本帝國の版圖に屬するのが當然でせう」

このとき、海軍將校は、とつぜん叫んだ。

「おゝ、人だ！」

人だ！と耳もとで叫ばれて、若い飛行士は思はず顔をあげた。

「どこに？」

海軍將校は、腰間の拳銃に手をやりながら、「むかふの岩角を見たまへ」と、はるか彼方を指差した。

飛行士は、その方へ双眼を移したが、「おう人間だ」と、同じく叫んだ。

「これは無人島ではないぞ」海軍將校はいった。

「われ／＼よりもさきに、この島を発見した奴があるな、よしッ、見定めてやらう」と、はや、飛行士は岩角の方に歩いてゆく。海軍將校も、その後には続いた。

岩角のところに行んでゐる人間は、それには頓着なく、じつと入江に浮ぶ飛行機に眺め入つてゐる。海豹の毛皮の外套を着、同じ帽子を眼深にかぶり、丸々着肥つてゐるので、その人物骨格もわからぬが、とにかく人間に違ひない。

飛行士が近づくと、彼はチラとこちらを見たが、その眼は野獸のやうに光つてゐた。海軍將校は、黙つてその男の胸もとへ拳銃をつきつけた。

すると、野獸のやうな恰好の男はニヤリと笑つて、

「生憎、熊ぢやないですよ」といつた。それは、流暢な日本語だつた。海軍將校も、飛行士も意外の面持で、怪しい男の顔を覗き込んだ。

「いや、ご苦勞さま。長いあひだ待つてゐましたよ」

怪しい男は、さういつて毛皮の帽子を脱いだ。蓬頭垢面、みるからに原始人らしい人間の顔、しかも七十に餘る老人だつた。アイヌでもなし、クリル人種でも、アレウト人種でもなし、また



ギリヤークでもない。陽にやけた顔は、その人種を識別することさへできなかつた。

「僕等を知つてゐるのか、君は？」海軍將校は、鋭く相手を睨みながらいつた。

「さうだ。太平洋無着陸横断飛行を企て、八月十五日、北海道の根室を出發したきり行方不明となつた、あなたは、志筑海軍少佐であります。そして、そちらの方は、日本の有名な飛行家、虎川雄一郎さんでせう」

圖星を指されて、二人はたち／＼とならざるを得ない。

「どうして、それを君は知つてゐるのだ。君の國籍は？」

「富士と、櫻と、清水を誇る日本人です」

「おゝ、君も日本人か」

志筑少佐は、おもはず進み寄つて、怪人物の手を握つた。

「猛獸でなくて氣の毒でしたね」

「いや、冗談ぢやない。僕等は、かね／＼北太平洋上の此無人島に目星をつけてやつて來たが、此島に人間が、しかも同じ日本人が住んでゐようとは思はなかつた。しかもあなたのやうな、老人が生きてゐようとは思はなかつた。」

「こゝは、生憎、無人島ではなかつたからね……」

老日本人は、砂地を歩きだした。新來の二人は、其後に隨つた。

「あなたは、どうしてこの島にゐられる？」と、志筑少佐は訊ねると、

「漂流者なのさ」といつた。

「たつた一人ですか」

「いや、仲間がゐるよ。仲間が大勢ゐるよ」

「えゝ？」

「まア、驚くことはないさ……吾々の部落へ案内しませう」と言つて老人は、猿のやうに敏捷に岩根を越えて先へ往く。

石根をこえ、お花畑をわけり十二三町ほど島の中央へ進むと淺い谷間があつて、小川が流れてゐた。そこには、低く地をはふやうに灌木もはえてゐる。老人は、振りかへつて、「こゝが、部落の入口です」といつた。

「あ、家が見えます」虎川飛行士は、叫んだ。

「さうです、われ／＼の屯所です」



それは、灌木のはえてゐるあたりに、二三見うけられた低い丘陵の中腹に穴をほつた粗末なものでしたが、その近くに木造バラック平家の建物もあつた。

「あのバラック建は、何ですか」

「あれは、工場です」

「え！」

「お粗末ながら工場ですよ」

「ほう」

新來の二人は、むしろ呆れた。こんな絶海の無人島に、工場をたてるなど、常軌を逸した沙汰だとおもつた。

「何をつくつてゐるんです」

「兵器ですよ」

「え、兵器？」

「よく／＼呆れざるをえない。」

「左様、もつとも尖鋭な兵器をつくつてゐる」

「だが、兵器をつくる材料、原料などは、見渡すところ、此島では求められないぢやありませんか」

「物々交換さ」

「え！」

「つまり、仲間が、こゝで獵した貴重海獣を、はる／＼外國へ賣りに往つて、さうして原料、材料を求めてくる」

「どうして、外國へ賣りにゆきますか」

「それがあればいゝぢやないか」

「船？……船があるんですか」

「南岸の東郷灣に、世界の最優秀船といつても噸數が三百噸ほどの補助機附帆船だが、其機關は無限發動機なので、その點、世界の最優秀船といつてもよい」

「無限發動機？それは、世界の宿題となつてゐる壓搾空氣で動く奴ですか」

「いや、われ／＼のつくつた無限發動機は、つまり地球の回轉の原理から夢想したやつさ」

「ほう、一度大きな力を加へられ、それが永劫に動く、不可解な地球回轉の原理から着想して



無限に動く發動機をつくるなど、人類の力ではたうてい不可能なはずだ」

「しかし、地球の回轉は眞理である」

「もちろん、眞理にはちがひないが、もし、このことが實現すれば、これまでの物理学の原理は根柢からくつがへるだらう」

「さうだ。われ／＼は今や、物理学の原理を着々としてくつがへしつゝあるのぢや」

志筑少佐は、みたび呆れてしまった。この無人島にすむ日本人はみんな夢想家にちがひないと斷定してしまひたかつた。

やがて、半穴居の屯所のほとりまでくると、穴居の中に電燈の灯つてゐるのを正しくみつけて、虎川飛行士は思はず又叫んだ。

「おゝ、電燈がある、文明の都市だ」

老人は、微笑して、「ハ、ハ、あなた方は、田舎者ぢやね、電燈をはじめてみたやうにおどろくなど。見給へ、工場でも、屯所でも、ふんだんに電力を應用してあるが、これがみんな、れいの無限發動機の威力のおかげなんぢやよ」

「誰がつくつたのです？」

「島の主、櫻戸敏夫ぢや」

「えッ！櫻戸……？」志筑少佐は、わが耳を疑つた。

屯所の電光燦然たる穴居の一室で、新來の客二人は怪老人の紹介で島の主櫻戸敏夫に對面した。櫻戸敏夫といふのは、すでに讀者に馴染のある名だ。そのむかし、明治二十六年九月の某日、

海軍少佐士官二十八名ほか都下學生新聞記者等總勢四十餘名を引率し、三本橋スクナー型帆船愛鷹丸に乘組み、北海漁業を目的として、實は、ハワイ××を目的に、東京灣頭を太平洋に出たまま途中暴風に遭ひ行方不明になつた例の海洋青年團の團長櫻戸敏夫少佐であつたのだ。

櫻戸少佐は、すでに七十を過ぎた老體であつたが、その容貌、その骨格、壯者を凌ぐものがあつた。かたはらの石川雄六老中尉（志筑少佐等を案内してきた老人）は、

「この方が、太平洋無着陸飛行を敢行せられ、北千島において行方不明になられた志筑少佐と虎川君です」と、櫻戸少佐にいつた。

「わしは、櫻戸ぢや」櫻戸は、手をのべた。その手を固く握つて「私は、志筑少佐です。この無人島で先輩にお目にかゝれるとは信じられませんでした」

「さや、わしの方でいふべきことぢや。こんな孤島へようこそと申上げたさ」



虎川飛行士は、石川老中尉に向つて「どうして、われ／＼の飛行のことを御存知なのです？」と、ふしぎさうに訪ねた。石川老中尉は微笑して「なアに、無線電話もあれば、ラヂオの設備もある。世界の隅々のことは、何ひとつ残すことなくわれ／＼の耳に入るのさ」

櫻戸老少佐は、感慨深げに足下の花に見入りながら言つた。

「太平洋の、もつとも近い將來における怒濤のことをおもふと、僕は、しみ／＼東郷老元帥の死を惜む。まつたく、東郷さんに、もう十年生きてゐて貰ひたかつた……これは日本民族全體の希望でした」

志筑少佐も、しみ／＼言つた。「軍人も、政治家も、みんな時勢にしたがつて伶俐になる。私有、私慾、巧利に走るやうになつた。つまり、それは凡庸人のつねなのだ。わしは、これは政黨政治がこのやうに人格を低下したものと心得る。凡庸が政治し、凡庸が軍事をやり、凡庸が教育する。これが、日本現状なのだとおもふ。だから、その半面に、東郷さんのやうな偉大な人物を惜むのぢや」

「まつたくそのとほり……、もう東郷さんのやうな偉い軍人もなくなつて、日本の海軍も淋しいですよ」

「しかし、さう悲觀したものではない、又人物が居ぬとも限らぬ。軍縮豫備會議に代表として能辯を揮ひ、見得を切るやうな人間はいやだが、大將級のうちには、まだ／＼東郷の息のかゝつた人物がないではない」

「東郷さんは、生前、殊に晩年よくあなたのことを申してゐたさうですよ。櫻戸はどうしたらうな、むざ／＼死ぬる男ではない、世界のどこかにまだ生きてゐて、わが國を守護してゐるやうにおもはれてならん、と常に申されてゐたさうです」

「うむ。……東郷さんは、わしを信じてゐたのだ」

「東郷さんの想像どほり生きてゐられたのですね。しかも、暗雲低迷する太平洋の眞中で、祖國の守りとなつてゐられるとは……」

志筑少佐等の乗つてきた飛行機は、南岸の東郷灣に廻航された。そこには、無限の動機を掘付けた優秀船愛鷹丸が碇泊してゐた。それを、眼下にみおろす丘の上で、草を敷いて櫻戸老少佐と志筑少佐は、さつきから語り合つてゐる。

海は深綠色で、寶石のやうに輝いてゐる。天空も淺緑に美しかった。どこからか、おいらん鳥の啼く聲が、長閑にきこえる。



「君、志筑少佐！」と、海洋のかげやかしさに見入つてゐた櫻戸老少佐は、志筑少佐をかへりみて、そのとき改まつた調子でいつた。

「太平洋のこの穏かさはどうだ。まるで湖水のやうだ」

「さうです。古い形容詞ですが、まったく鏡のやうですなア」

「ところが、この静かな海洋も、やがては、狂瀾怒濤と化すことがあるから油断がならぬ」

「人爲的にも……」

「さうだ、人爲的に、もつとも近き將來、この平和な、明るい太平洋が、逆巻く怒濤と化さぬとはかぎらぬよ」

「僕は、それを信じて、太平洋無着陸飛行と稱して、この島へ身を隠したわけです」

「われ／＼が、ハワイ〇〇を断念し、この島に移住し、四十年も雌伏してゐるのは此太平洋の人爲的風波を抑へんがための、いはゞ義勇の軍なのだ」

「ですから、われ／＼が、こゝへ訪れたことは、まったくの天佑、つまり、これは神のお引合せだと感謝してゐる次第です」

「少し歩かう」と言つて櫻戸少佐は、草原を起ち上つて歩き出した。志筑少佐もそれに随つた。

「日露戦争もはじめは、知る由もなかつたが日本海々戦前、これを北洋の外國獵船からきゝ知つて、とても勇躍したものぢや。あのころは、北海の防備はまるで手薄だつた。われ／＼は義勇軍を組織して、カムチャツカ地方へ進撃し、あちらの義勇兵や守備兵と渡り合つたことはあまり世間に知られてないやうだな」

「全く知られてゐません。たゞ郡司大尉が報效義會員を率ゐてカムチャツカに渡り、露の守備兵と戦つて捕へられ、奥地の城砦に囚はれたといふことは一部に知られてゐますが、一般の知らぬことです。ましてあなた方の事は國民一人として知る者がありません」

「たゞ一人、東郷さんだけは、北海に櫻戸在りと信じてゐたと、わしはおもふのだ。その櫻戸が、こんどこそは、地下の東郷さんをして快哉を叫ばしめる壯舉をしてみせる」

「近づく太平洋〇〇においてですね」

「さうだ。もつとも近き將來の〇〇に、太平洋を自由自在に駆廻つて、祖國を守るつもりだ」

「用意は出来てゐますか」

「大丈夫！いつでも来いと、待構へてゐるのだ。奇襲は戦争にとつて最も好ましい戦術だ。われわれは、奇襲又奇襲、敵の本據を衝くことを本分としてゐる。奇襲兵器をつくつてをる。決死



隊は手具懸引いて待つてゐる」

「僕も、むろんその決死隊の一員でせうな」

「君は、わしの参謀ぢや」

二人は、いつまでも、草野を歩いてゐる。いつか、夕暮となつて、名物の濃霧が全島を包んでしまつた。

## 血に匂ふ太平洋

櫻戸老少佐は、感慨深げに海洋の彼方に双眼を投げた。

「志筑少佐、わしは、東郷さんの國葬日に、詩をつくつたよ。それをこゝで披露しよう。」聖なる乙旗」といふのぢや」

凡庸が政治し、凡庸が論争し、凡庸が戦略を弄ぶ時代、おしやれで、おしやべりで、豚病質な、平和を歡ぶ人の世の春、我護國の柱石、東郷元帥こそ世界の岩壁を打つ怒濤。

アドミラル、トーゴー

人傑飢饉時代の最後を飾つた寶石、そして、いや世界中の子供たちの愛敬を一身にあつめた善きおぢさん。

建國の精神を實踐した寡言、豪毅、果斷の英雄今や亡し。

九段の坂を往く海軍軍樂隊の悲しみの曲、愛悼の色濃き街にたゞすみて、涙とともにわれらは永遠に生きる老元帥の面影を偲び、



『皇國ノ興廢コノ一戦ニ在リ』

あゝこの千古千滅の言葉を聴く。

あゝ、日本海、太平洋、波徒らに荒れ狂ふとも、われらは、つねに、

『本日天気晴朗なれど浪高し』

の尊き詩句に感激する。

この熱情、この心意氣を、いまこそ、心に牢記せよ。

非常時日本の國土のうへに

つねに 翻る聖なる乙旗。

『これは、ほんの即興だが……』

『つねに 翻る聖なる乙旗……まったくその心意氣ですね』志筑少佐は、感激して草をふみに  
じりながら老少佐に訊ねた。

『明治二十六年に東京灣を出帆せられ、こゝに着いてから、ずつとこの島に住んで居られるの  
ですか』

『さうだ、もう四十年以上も、この島で暮してゐる』

『ちや、あのと時の同志の方々はみんな相當の御年輩になられたわけですね』

『左様、わしのやうに、たいがい白髪のぢぢいになつた。然しながらこの部落には青年もゐる  
よ』

『えッ！』

『あとから同志に加はつた連中だ。例の郡司大尉報効義會の會員もゐるし、その後、われ〜  
に拾はれて、この島の住民となつたのも多い』

『すると、あのころからみると、可成り同志の方も殖えたのですね』

『八十幾人、つまり四十年のむかしからみると、人口が二倍になつてゐる』

『生活状態は？』

『大體、給自足さ。海産物は無盡蔵だし、島では野菜物がとれる』

『しかしお米はとれないでせう』

『必ずしも米の飯を食ふ必要はない。島では麥がとれる』

『麥？こんな孤島に麥がとれるのは奇蹟だ』

『いや、奇蹟でもなんでもない、寒い土地では麥がよくとれるよ。北千島、たとへば占守のや



うな島でも麥がとれるのだから、海洋の中の孤島で麥がとれぬはずはあるまい。いまに、君たち  
に、うまい麥飯を御馳走しよう。さういへば、僕はお腹が空いてゐる。ね、志筑少佐、あんたも  
お腹が空いてゐるんぢやありませんか」

その翌日、九月のある日の朝。東郷灣頭から、南東をさして進んでゆく一艘の怪船があつた。  
これは、孤島の義勇軍が自慢の潜水艦「第一號」であつた。蓄電池もつかはずに、れいの無  
限發動機によつて潜航自在、アメリカ西岸への往復など樂なものなど彼等の誇りの一つである。  
この潜水艦長は、石川老中尉であつた。それから、志筑少佐が特に便乗した。

「第一號は、海洋を悠々と航進してゐる。濃霧がはげしく、東郷灣を出てしまふと、まもなく  
その姿は霧に没してしまつた。

潜水艦で、志筑少佐は石川老艦長を捉へて雑談を交へてゐる。

「いよ／＼〇〇かな」これは、志筑少佐だ。

「對支貿易が、日本の産業軍の進出で脅威をうけてゐるので、奴等も、〇〇して更生しなけれ  
ばならんで、日本に××するのだ。〇としても止むを得ぬだらう」

「日本は軍縮會議に失敗し、現勢比率をおしつけられてしまつたので海軍力は甚だしく弱めら  
れてゐる。わが海軍部内には自信があるかな」

「わからん」

「空軍は、何といつても奴等にはかなはぬだらう」

「數においてはね」

「質においても？」

「そいつは、わからんよ、いくさをしてみぬことには」

「奴等は、飛行機で奇襲することを唯一のたのしみにしてゐる」

「なアに、その間に、わが潜水艦が敵の咽喉を扼してしまふさ」

志筑少佐は、話題を轉じた。

「滿洲國の將來はどうだ」

「わが對滿政策をさすのか」

「それも、勿論だが、滿洲國は、將來ともわが日本の友邦である



『日本人も、しつかり禪をしまて掛らねばならぬといふものだ』

『そのほか、共産主義の假面を冠つて民族主義の兇刃を磨くロシアが背後に控へてゐるし、支那本國だつて、いつまでも弱腰ではあるまい。いつか、日本に衝突時代もあらう。何にしても、祖國の將來多事多端さね』

『國內の情勢も甚だ宜しくない』

『さうだ。農民も疲弊し、都會中心の政治經濟機構が、次第に日本の國力を低下せしめつゝある。青年男女はいよ／＼洋風化し、麻雀、ゴルフの悪風に染み、虚榮の市、百貨店は人心をいよ／＼浮薄にする。ちやうど、われ／＼の青年時代のやうなありさまだ。あの頃は日比谷の鹿鳴館を中心に、洋風歐化の風は全國に擴まり由々しい事態となつてゐたが、今日の祖國はまさに第二次鹿鳴館時代と稱してもよい。國民が颯起しなければ祖國はやがて亡びる』

國籍のわからぬ、異種異様の潜水艦の第一號は、慷慨悲憤の兩士をのせて、浪路はるけく南東

に針路をとり、悠々と航進を續けてゐる。

何處をさして？

どんな使命をおびて海洋を乗切なのか。それは、わからぬが、浪おだやかな太平洋が、やがて狂瀾怒濤と化することだけは、どうやら想像される。

太平洋の波に、血の匂ひが感覺されるのだつた。

(をはり)



昭和十四年七月二十日印刷  
昭和十四年七月二十五日發行

「日本海軍戰記怒濤」普及版附

定價一圓八十錢  
外地定價一圓

不許複製

著者 寺島 証 史

發行者 東京市神田區一ツ橋通三〇  
黑澤 洞

印刷者 東京市神田區錦町二ノ五  
田中 重 人

發行所

東京・神田一ツ橋通  
教育會館  
電話九段(四)一五五

日本公論社  
振替東京六〇七三一



書版重刊新社論公本日

伊東鏡太郎譯	梓喜多男譯	松平道天著	伊東鏡太郎著	伊東鏡太郎著	松平道夫著	和田篤藏著	須山卓著	丸山義二著	丸山義二著
ドイツ戰歿兵士の手紙	大陸・支那	戦争の知識	國際スパイ戰	スパイ	萬人の科學史	風土巡禮	亞細亞民族の研究	銃後の土	農林小説集 藁屋根記
四六判美裝 本文二五〇頁	四六判美裝 本文三〇〇頁	四六判美裝 口繪寫眞廿葉	四六判美裝 本文三〇〇頁	四六判美裝 本文二九〇頁	四六判美裝 本文三二〇頁	四六上製函入 本文三三〇頁	四六判美裝 本文三〇〇頁	四六判美裝 本文二九〇頁	四六判美裝 本文二九〇頁
價一・五〇	價・九〇	價・九〇	價一・〇〇	價一・二〇	價一・五〇	價二・五〇	價一・五〇	價一・五〇	價一・五〇

いさ下文注御宛社本接直は節のれ切品に店書



390  
366



終



¥1.80

外地定價一割増